妹は俺に憑依する

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妹は俺に憑依する

【Ｎコード】
Ｎ５５０５Ｖ

【作者名】
うわの空

【あらすじ】
自殺したはずの妹の幽霊が、何故かはっきりと見える俺。そんな俺に、妹は言った。
『あたしは自殺じゃない。誰かに突き落とされたの。ビルの屋上から』
妹の幽霊と話したり、犯人を探したり、たまに憑依されたりする。そんなお話。

（※推理小説ではありません）

01　違うよ

妹が死んだ。
事故じゃない。病気でもない。
自殺だ。

ビルの屋上から、妹は飛んだのだ。屋上には妹のスニーカーと、ショルダーバッグが残されていた。

なぜ、妹が死を選んだのか。俺には分からない。
妹は明るくて活発でいつも笑ってて、死ぬほど悩んでる様子なんて見せたことがなかったし、虐待とかそんなのもなかった。
だとすると外で何かあったのだろうか。いじめ？　失恋？
……いくら考えたって、分からない。はっきりしているのは、俺より2つ年下、14歳の妹が死んでしまったことだけだ。

妹には、友達も結構多かったらしい。同年代と思われる女の子たちが次々と葬儀にやってきては、ぼろぼろ泣きながら帰って行く。
俺はその様子を、傍観するような気持ちで眺めていた。
「夏樹（なつき）君、強いね。泣かない」
そう声をかけてきたのは俺と同い年の幼馴染、如月（きさらぎ）美鈴（みすず）だ。ただでさえ白い美鈴の肌は、さらに白くなっている。というか、少し血色が悪い。胸まであるロングヘアーは、後ろでひとつにまとめられていた。
彼女は俺の妹と仲が良かったので、妹が死んだ後はしばらく塞ぎこんでいた。葬儀の日になってようやく、というか、なんとか妹のもとにやってきたという感じだ。

「泣かないのが強いとは限らないよ」
俺が苦笑すると、美鈴はボロボロと涙をこぼした。そんな美鈴の様子を見て、
「来てくれてありがとう。でももう、帰って休んでくれ。疲れただろ？」
俺がそう言うと美鈴は頷き、ハンカチを口にあてたまま葬儀会場を出ていった。

「やれやれ」
俺はため息をついた。俺が泣いていないのには、理由（わけ）がある。俺の斜め前にあるその理由（わけ）を、俺はじっと観察した。

『うわあああん、あたし、死んじゃったあああぁぁ……』

にっこり笑っている妹の遺影の前で、その妹がわんわん泣いているのだ。ぎりぎり肩には届かないくらいの黒髪、大きな目と小さな口。細くて小さな身体。ピンク色のTシャツに、黒のジーンズ。死んだ時と、同じ服装。……間違いなく、妹だ。死んだはずの妹が、何故かそこにいるのだ。
そして何故か俺にだけ、それが見えている。――霊感なんて、なかったはずなのに。
「死んじゃったって、……自殺したのはお前だろうが」
俺がぼそっと突っ込みを入れると、その声は彼女にも届いていたらしく、妹はパッとこちらを向いた。涙のせいで、頬がてかてかに光ってる。
『お兄ちゃん……？』
「こっちに来い。ちょっと落ち着け」
落ち着きたいのは俺も一緒で、なんで死んだ妹がここにいて、しかもわんわん泣いているのか、さっぱり分からない。俺は妹の姿を

もう一度確認する。幽霊は透けてるんじゃないかと思っていたが、ちっとも透けていない。これだけはっきり妹の姿が見えると、妹が死んだという実感もわかなかった。
妹は俺の言った通りこちらにやってくると、空いていた隣の座席にちょこんと座った。それから周りを見渡して、おどおどしながらも俺に耳打ちした。
『お兄ちゃん、あたしのこと見えてるの？』
「見えてるし聞こえてる」
『なんで？』
「俺の方が訊きたいね。ていうかお前、そんなにぼそぼそ話さなくていいよ。どうせお前の声は、俺にしか聞こえてないんだから」
『あ、そっかー！！』
「おい、急に大声出すなよ！　びっくりするだろうが！」
「ちょっと夏樹。何を騒いでるの？」
背後から母に声をかけられ、俺と妹は沈黙した。いやだから、妹（おまえ）は喋っててもだいじょうぶなんだってば。

火葬場に向かう道中で、妹は耐え切れなくなったように言った。
『ねえ。あたし、燃やされちゃうの……？』
俺は周りには聞こえないように、小さな声で返事をする。
「ああ」
『ひどいよ。まだあたし、ここにいるのに』
「だけどお前、このまま焼かなかったら、どんどん腐ってくんだぞ？　それも嫌だろ？」
俺がそう言うと、妹は口をへの字にした。
『お兄ちゃん、もっと他に言い方とかないの？』
「……すまん」
ぐずぐずと泣きだした妹を見て、不思議な気持ちになる。生きてた頃は、こんなに泣くような奴じゃなかったのに。自分が死んだの

が、そんなに悲しいのか。
「自殺したくせになあ」
俺が首をかしげると、妹も首を傾げた。
『自殺？』
「そうだよ。お前、ビルの屋上から飛び降りて自殺したんだろ？」
『……え？』
「……あれ？」
２人とも沈黙した。妹は首を傾げたまま、きょとんとしている。
「……自殺、だろ？」
俺が確認するように言うと、
『違うよ』
妹が首を振った。
『私、誰かに殺されたの。突き落とされたんだよ、ビルの屋上から』

02　思い出せない

火葬場に到着してからは、あっという間だった。　妹の身体は煙になり、骨だけが残った。
『うわー、私の骨って結構太いんだー。給食で、毎日牛乳飲んでたせいかな？』
なんだろう、この間抜けなコメントは。

遺骨とともに、妹は帰宅した。……変な言い方だが、ありのままに言うとそうなる。
幽霊は飛ぶのかと思っていたが、妹は飛ばない。生きてた時みたいに、普通に歩く。ただ、足音もなければ影もない。

玄関で靴を脱いでいる俺に、母が話しかけてきた。
「……晩御飯、できたら呼ぶから。食べたいものはない？」
疲れきった母の顔と、それを見る妹の目。
「なんでもいいよ」
俺はそう言うと、さっさと自分の部屋へと向かった。
『あ。待ってよお兄ちゃん』
パタパタと、……足音も立てずに妹が付いてくる。まあいい。訊きたいことは山ほどある。

階段を上り、廊下の突き当たりにある自分の部屋に入ると、一応鍵をかけた。
『わ。お兄ちゃんの部屋に入るの久しぶりかも』
「そんなことはどうでもいいだよ」
俺はベッドに腰掛け、妹を椅子に座らせた。妹は俺の部屋がよっ

ぽど珍しいらしく、小さな部屋をきょろきょろと見回している。
本棚やパソコンがあるくらいで、これといって面白いものはないはずだが。
『ねえねえ、エロ本どこ？』
「……そんなことはどうでもいいんだよ」
ていうかお前はそれを探してたのか。俺はため息をつく。今はそれどころじゃないってのに。
「お前、自殺じゃないってのは確かなのか？」
これは重要かつ深刻な問題だ。妹は自殺ではないと言った。そして、事故でもない、と。
『うん。私、誰かと一緒に屋上にいた。で、落ちた。……ううん、落とされた？』
妹は難しい顔をしながら、一言一言をかみしめるように言う。しかしなんでか曖昧で、最後にいたっては疑問形だ。
「――で？　誰なんだ。その一緒にいた奴は」
妹を突き落としたであろうその人物は。

妹はしばらくの間、首をひねり続けた。比喩表現ではなく、ほんとうにひねっている。まるでフクロウみたいだと、内心で笑ってしまった。
『思い出せない』
しばらくしてから、妹は首をひねるのを辞めて、真剣な顔で言った。
『なんでだろ。屋上にいた時の記憶が、すごく曖昧なの。誰かと一緒にいたことは覚えてるし、自分で落ちようと思って落ちたわけじゃない。それははっきり覚えてるんだけど……』
「なんでもいいんだ。何か覚えてないのか？　一緒にいたのが男か女か、それだけでもいい」
妹は頭を抱えて俯(うつむ)いた。しかし、
『だめ。やっぱり分かんない』

がっくりと肩を落とした。俺もがっくりしたいところだが、覚えていないものは仕方がない。
「で。……これからお前はどうするんだ？」
『どうすればいいんだろう』
会話が成り立っているようで成り立っていない。
「成仏は？」
『どうやるんだろう』
死んだことがないから、俺にも分からない。
「……未練、みたいなものをなくせば成仏できるのかな。例えば、お前を突き落とした犯人を見つけるとか」
『それかも！　この世に未練を残した怨霊が云々（うんぬん）って、テレビでよくやってるもんね！　それだよお兄ちゃん！』
妹は嬉しそうに、目を輝かせる。そういえば妹は生前、ホラーやオカルトの類が大好きだった。

しかし今、幽霊になってるのはお前だってのに。

「だけどどうしようか。『妹の幽霊が自殺じゃないって言ってます』なんて、警察に言いに行っても信じてくれないだろうし。状況だけで判断するなら、どう見ても自殺だからな」
『お兄ちゃん、あたしと一緒に犯人捜してよ。一人じゃ無理』
真剣な顔でそう言う妹を見て、俺は腕を組む。
「……お前、犯人のこと怨んでないのか？」
『え、なんで？』
「取り憑いたりしないのかと思って」
妹が大好きだったあの手の話では、自分を殺した犯人（あいて）に取り憑くはずだ。なのに妹は、俺に取り憑いている。いや、取り憑かれてるわけでもないが。
『んー。分かんない。でも今のところ、恨んだりはしてない。なんでだろね？』

妹は苦笑しながら、頭を掻いた。肩の上の髪の毛が揺れる。
夏休み中に髪の毛を伸ばすんだと言っていた妹の髪は、永遠に肩の上にあるのか。
なんとなくそんなことを、思った。

「……わかった。お前が成仏できるよう、俺も協力する」
『ありがとうお兄ちゃん！』
妹は嬉しそうに笑い、
『で、エロ本はどこ？』

……こんな妹と俺の2人で、大丈夫なのだろうか。色んな意味で。

03　ごめん

母は何も言わない。父も、なにも言わない。つけっぱなしのテレビだけが、言葉を吐き出し続けていた。

母は箸を持ったまま、テレビをぼんやりと眺めている。父は黙々と食べ続けているが、それは「食べる」という動作をしているだけだ。無表情で、食べ物を口に入れるだけの動作。

当たり前と言えば当たり前だ。娘が、死んだんだから。しかも自殺。……だと、両親は思っている。実際はそうじゃないらしいが。

昨日の通夜の時には親戚がいたからよかったが、家族3人だけになると、これか。ここまで静かな夕食は、初めてかもしれない。いつもは騒がしい妹が、色んな話をして場を盛り上げていたのに。一人いなくなっただけで、ここまで違うのか。

『……』

両親の様子を見ている妹も、さすがに無言だ。これは、本人にとっても辛い光景だろう。

「……葵(あおい)さ、自殺じゃないかも」

俺がぽつりとつぶやくと、父が顔をあげた。母は無表情のまま、味噌汁から立つ湯気を見ている。

「何言ってるんだ？　夏樹」

「自殺じゃないかもしれないって言ってんだよ。遺書も何もなかったし、自殺するほど悩んでるようには」

「うあああぁぁぁ……」

母が、机に突っ伏して泣きだした。肘に味噌汁の入ったお椀が当たり、中身を派手にぶちまけながらお椀が床を転がった。

妹は、……葵は、母と俺と父の顔を見比べている。不安そうに。だけどその姿は、父にも母にも見えない。それが、もどかしい。

「夏樹お前、何か知ってるのか？」
「……」
自殺じゃないらしい。けれど、犯人は分からない。――なんて、俺が今言ったところで説得力も何もないじゃないか。
「ごめん、軽率だった」
母が泣きわめいているのを見ていられなくなった俺は、リビングから離れた。おろおろと母の周りをうろついていた葵だが、俺の後ろをついてくる。今にも泣き出しそうな、歪んだ顔を張り付けたまま。

一足先に階段を上る俺のあとを、葵は必死になってついてきた。
『お兄ちゃん』
「明日、お前が落ちたあのビルに行ってみよう。お前も何か思い出せるかもしれない。夏休み中だから、俺はしばらく自由に動けるしな。……今日はもう寝ろ」
葵の顔は見ずに、吐き捨てるように言う。
『お兄ちゃん』
「お前が自殺じゃなかったって父さんたちに伝えるのは、証拠を掴んでからの方がいいだろ。分かったな？　今日はもう、自分の部屋に戻れよ」
『おにいちゃ……』
「なんだよ！！」
思わず怒鳴ってから、はっとする。後ろを振り返ると、耐えきれなくなった葵が肩を震わせて泣いていた。叫ぶのをこらえるように、口元を両手で覆って。

途端に後悔した。自分はなんでこんなに浅はかなんだろう。

自殺じゃないと俺が言っても、両親にとっては何の慰めにもならない。

リビングのあの風景を見て、葵が不安がるのは当然だし、葵の姿は俺にしか見えないのだから、俺に向かって必死に話しかけてくるのも当たり前だ。

なのに俺は勝手にいらいらして、怒鳴りつけて、……葵を泣かせてしまった。

「……ごめん」

俺が低い声で謝ると、葵は泣きながらも、首をぶんぶんと振った。

「母さんなら大丈夫だ。だから葵は、気にしなくていいんだよ」

こんなこと言われても、葵は嬉しくもなんともないだろう。なのに葵は小さな声で「ありがとう」と言った。

そう言うべきなのは、俺の方なのに。

04　怖い

夢から目が覚めたら、眼前に女の顔があった。
「おわあっ！？」
思わず変な声を出して飛び起きる。そんな間抜けな俺を見て、葵は笑った。
『お兄ちゃん、びっくりしすぎー』
「おまっ……なんで俺の部屋にいるんだよ！」
昨夜、階段でひとしきり泣いた葵は自分の部屋に入っていった。それを見届けてから、俺は自分の部屋に入ったはずだ。一応、ドアに鍵をかけて。
なのになぜか妹は、俺の部屋にいる。
『幽霊ってドアでも壁でもすり抜けられるんだよ！　めちゃ便利だよね！』
葵はけらけら――いや、げらげら笑いながら言った。
飛べないくせに、すり抜けられるだと……？
『これで、お兄ちゃんの部屋はいつでも来れるね！　あと、お兄ちゃんが寝てる間にエロ本見つけといたから』
「う、嘘つけ。お前なんかに見つけられるような場所には」
『押入れの奥にあるものなーんだ？』
「……」
あんな本やこんな本ですすみませんでした。

リビングには誰もいなかった。とりあえず、食パンとオレンジジュースだけの簡単な朝食を用意する。テレビをつけるのが妙に面倒で、俺は静かなリビングで食事を摂り始めた。
『おいしい？　食パン美味しい？　ねえねえお兄ちゃん』
……静かじゃなかった。

「ふつーだよ。いつも食ってる食パンだろ？」
『ふーん』
「お前もなんか食べるか？」
『んー。多分食べられない、かな』
そう言われてみればそうだ。壁をすり抜けられるのに、食パンを掴めるというのもおかしい。
葵は悔しそうに、わざとらしく机をバンバンと叩いた。……そんな感じの、ジェスチャーをした。
『あーあ。あたしはもう一生、ケーキとかアイスとかチョコとか食べられないのかなあ』
「お前の一生はもう終わってるからな」
『そうだけどー……』
葵がふくれっ面をして、そっぽを向いた。
こうしてると、本当に葵が死んだのかどうか分からなくなってくる。恐らく葵自身も、自分が死んだんだという自覚があまりないのだろう。俺にしか見えないし聞こえないわけだが、俺とは普通に話せるし、笑えるから。

朝食を食べ終わると、俺は出かける支度をした。目的地は、葵が死んだビルだ。俺が玄関でバタバタしている音を聞きつけて、父がやってきた。
「どうした夏樹」
「ちょっと出かけてくる」
「……夕飯までには戻ってこいよ」
戻ってこいよ、がいやに重く聞こえた。

例のビルは、自宅の最寄り駅から少し離れた場所にあった。変な

言い方になるが、寂(さび)れた場所にある寂れたビルで、9階建てのビルの半分以上のフロアが「空席状態」だった。テナント募集と書かれた紙は、黄ばんでボロボロになっている。人通りも少なく、淀んだ空気が辺りを覆っているように感じられた。大通りから1本入ると、こんなにも静かになるのか。

恐らく、今はもう屋上には上がれなくなっているだろう。人が一人、死んでるんだから。

「葵、なにか思い出したことはあるか？」

後ろにいる葵に問いかけてから振り向くと、

『どうしよう……』

葵がすがるような目で、こちらを見ていた。

「なんだどうした！？」

『CD、レンタルしたまんまだったの思い出しちゃった……』

葵の視線の先には、大通りにあるレンタルショップの看板。店名の横に、旧作１００円！　と書かれている。

「――他に何か思い出したことは？」

『ないけど？』

おいこら。

「……そのCDは、死んだ日に借りたのか？」

『ううん、6日前。1週間レンタルだから、明日までに返さないと』

俺の妹はなんでこう、変なところでこんなにも律儀なのだろうか。

「分かった。俺が明日、返しに行ってやるから」

『ありがとうお兄ちゃん！！』

妹は嬉しそうに笑った。抱きついてきそうな勢いだが、恐らく抱きつけずにすり抜けるだろうと思う。

「葵。多分、屋上は封鎖されてるはずだ。けど、お前ならすり抜けられるだろ？　見てくるか？」

俺が訊くと、葵は笑顔から真顔になった。それから、

『……ごめん、今はちょっと怖い』

下を向いたまま、呟いた。
「――分かった。無理する必要はないしな。まあ、ＣＤのことを思い出しただけでもマシだと思おう。延長料金とか勘弁してほしいし」
俺が笑うと、葵もほっとしたように笑った。

正直、俺は少しだけ後悔していた。ここに来たのは俺が連れてきただけであって、葵が行きたいと言ったわけではなかった。
葵は怖いと言った。……当たり前かもしれない。自分が殺された、場所なんだから。

俺は後悔してばっかりだな。

ビルの屋上を見上げると、背の低い鉄柵が、必死になって空に手を伸ばしているように見えた。

05　ひょーい

『ひょーいって、できないのかなあ？』
ハンバーガーにぱくついてる俺を見ながら、真剣な顔で葵は言った。

朝から「例のビル」に行ったはいいが、やることは特になかった。しかし、空気の重たい家にそのまま帰るのも少し抵抗がある。ちょうど小腹も空いてきたし、ファーストフード店で時間をつぶしてから帰ることにした。

ハンバーガーを食べながら葵の方に目をやると、なにも食べていないはずの葵が口をもぐもぐと動かしていた。
「……何やってんだ？」
『ハンバーガーを食べてるふりしてるの。そしたら、そのハンバーガーのおいしさが分かるかなあと思って』
「なんじゃそりゃ」
『あたし流、「分かりたい時は真似をする」の術！！』
「なんじゃそりゃ」
俺は笑った。それから「お前はもう食べられないからなあ、残念」と言ったら、葵の口からひょーいという言葉が飛び出てきたわけである。

「ひょーいって……あの憑依のことか？」
『お兄ちゃんが言ってるのが、どのひょーいか分かんないけど、多分そのひょーいだよ』
葵は真剣に俺の顔を、ではなく、ハンバーガーを見つめている。
「……もしかして、俺に乗り移って、ハンバーガーを食べようと思

ってるとか？」
『うん！』
そんなに嬉しそうな顔をするな。
「お前、簡単に言うけどさあ。俺は別に霊能力者でも何でもないんだぞ？」
『そんなの知ってるよ。お兄ちゃんはただの変態だよ』
「人聞きの悪いことを言うんじゃねえよ」
『私の声は誰にも聞こえてないよ』
俺の妹はいつの間に、こんなに口が達者になったんだ？

夏休み中のファーストフード店は、小さな子どもを連れた家族がやたらと多く、騒がしかった。騒がしい店は落ち着かないし嫌いだが、葵と話すときはむしろ騒がしい店の方がいい。一応、他の人間にはあまり聞こえないように、俺は小声で葵と話した。
「お前、憑依の仕方とか分かるのか？」
『分かんない！　だから、やってみていい？』
「だから、の意味が分からん」
『いいじゃんかちょっとくらい。ちょっと試してみるだけ！　ね？』
俺はため息をついた。食べかけのハンバーガーを包み紙でくるんで、トレーの上に置く。
「じゃ、やってみろ」
『やったあ！』
どうせできないんだろ。そう思ってた。

葵は俺に近づくと、
『んー、こんな感じかなー』
とブツブツ言いながら、俺の頭にそっと手を置いた。らしい。

次の瞬間。頭に岩が降ってきたような衝撃に、俺の意識は押しつ

ぶされた。

真っ暗な世界から目が覚めると、そこはやっぱりファーストフード店だった。

「――あれ？」

食べかけだったはずのハンバーガーがない。それからなぜか、腹いっぱいになっている。

『お兄ちゃん、大丈夫？』

俺は、向かいに座っている葵の方を見た。葵は満足そうに、俺に向かって笑顔を振りまいている。

「え、あ、あれ？」

『できたできた、ひょーい！　結構簡単なんだねー』

「え？　あれ？」

『ハンバーガーおいしかった！　ありがとう！　あと、お兄ちゃんの手ってやっぱりゴツイね。お兄ちゃんも一応、男なんだねえ。高校生だしさ、』

「お、おい……？」

『え？』

葵が目をぱちくりさせる。多分俺も、ぱちくりしている。

『お兄ちゃん、もしかして覚えてないの？』

「えーっと？」

『あたしはお兄ちゃんの中に入って、お兄ちゃんの身体を使って、ハンバーガー食べたんだけど』

俺は少ない脳みそをフル回転させて、前後の記憶を探った。葵が憑依してみたい、と言ったところまでは覚えている。が、そのあとは……

「まったく覚えがないんだが」

『え？　じゃあお兄ちゃん、今までどこに行ってたの？』
「分かんねえ」
つまり、葵が憑依している間は、俺の意識はなくなるということらしい。そこまで考えて、俺は愕然とした。

葵が憑依して、そのまま俺の身体を乗っ取ることも可能だということだ。

「お、おい。葵……」
俺が言いたいことを、葵も察したらしい。
『ご、ごめんね。勝手にハンバーガー食べちゃって……』
察してなかったらしい。
「それはもういいから、えっと、憑依するのは控えようか」
『え、なんで！？』
「もしもお前が、俺の身体から出られなくなったらどうすんだよ！」
『大丈夫！　そしたらあたし、除霊師さんのところにちゃんと行くから！』
どこら辺が大丈夫なのか、小１時間ほど問い詰めてやりたい。

結局その日の収穫は、ＣＤの返却日が迫っているということと、葵が俺に憑依できるということだけだった。

しかしいくら妹とはいえ、幽霊に憑依されて大丈夫なんだろうか、俺……。

06　ただいま

帰宅すると、家の空気が少しだけ弛緩した。母は玄関まで俺を迎えに来て、
「よかった。夏樹が戻ってきて」
そう言って、泣いた。

あの日、葵は「ちょっと出かけてくるー」と言い残して、そのまま帰ってこなかったのだ。

――いや。本当は今、葵は俺の隣にいる。そして、
『ただいま！　ただいま！　た、だ、い、まー！！』
と甲高い声で叫んでいる。しかし、母には届いていない。
母は涙を拭いながら、
「晩御飯、食べるでしょ？」
「うん。荷物を置いたらすぐ行く」
ほっとした顔の母を残して、俺は2階に上がった。自分の部屋に入り、ショルダーバッグを床に放り投げる。それを後ろから見ていた葵が、
『お兄ちゃん。憑依して、お母さんにただいまって言いたい』
深刻そうな顔で、そう言ってきた。……気持ちは分かる。しかし、
「だめだ」
『なんで！？　あたし、ちゃんと憑依できるし、その後はちゃんとお兄ちゃんの身体から出ていくよ？』
「そういうことを心配してるんじゃない。今の状態の母さんにお前が憑依して会いに行ったって、タチの悪い冗談……俺の芝居だと思われるだけだ。お前だと証明する方法がない。だろ？」
俺が諭すと、葵は黙り込んだ。葵をいじめるつもりはないが、母にこれ以上負担をかけたくなかった。

「……分かるな？　葵」
俺が確認すると、葵は目を伏せたまま、無言で頷いた。

その日の夕食はカレーだった。……葵が嫌っていたにんじんは、相変わらず入っていない。
「おいしい？」
やつれた笑顔で、母は言った。父は無言で、スプーンを動かしている。
「美味いよ」
俺が答えると、母は微笑んだまま、俺の隣を見た。
なにもないその空間は、かつて妹が座っていた場所だった。
葵は今でもそこに座っている。けれど、母にはやっぱり見えていない。

「明日は何が食べたい？」
カレーを食べ終える頃、母が俺に訊いてきた。相変わらず、張り付けたみたいな薄い笑顔で。
何が食べたいか。これはいつも訊いてくることなのだが、俺は悩んだ。
というのも、その質問に俺が答えたことはあまりなかったからだ。いつもなら、葵が答えていた。
「うーん……」
唸る俺に、ぼそっと
『チンジャオロース』
葵が呟いた。
「……チンジャオロースがいいかな」
俺がそう言うと、葵は目を丸くし、母は首をかしげた。

「夏樹は、ピーマンが苦手じゃなかった？」
「最近ちょっと好きになりだしたんだよ。だから、チンジャオロースにしてくれ」
俺は笑いながら、食卓を離れた。葵が不思議そうな顔をして、ついてくる。
『お兄ちゃん？』
「明日の晩飯、お前が食えよ。許してやる」
『憑依してもいいの？』
「ああ。だけど、ちゃんと俺のフリするんだぞ」
『やったあ！！』
葵は嬉しそうに、その場でとび跳ねた。……音は、しないけど。

例えば俺はいつでもハンバーガーを食べられる。
だけど葵は？

葵が成仏する前に、いなくなる前に、俺が葵にできるのはそれくらいしか思いつかなかった。

07　5秒だけだよ！

携帯のアラーム音で目覚めた俺は、あたりを見渡した。いつ通りの見慣れた俺の部屋。葵は、……いない。
俺はため息をついて、上半身を起こした。

いくら妹とはいえ、起きた瞬間目の前に顔があるのは恐ろしいものがある。

俺が階段を下りる音を聞きつけて、葵が自分の部屋から出てきた。昨夜はちゃんと、自分の部屋で眠ったらしい。後ろから必死に、声をかけてくる。
『お兄ちゃん、お兄ちゃん！』
「なんだ？」
『おはよう！！　おはようございます！！』
「……おはよう」
朝からどうしてこんなにハイテンションなのだ俺の妹は。

今日もまた、トーストとジュースだけの朝食を摂る。その場にいるのはやはり、葵だけだ。
「今日はその、お前がレンタルしてたっていうCDを返しに行こうか」
『うん！』
「葵の部屋にあるのか？　そのCD」
『そうだよ』
そういえば、葵の部屋に入ったことはあまりない。葵が幽霊になってから初めて俺の部屋に来た時、久しぶりだと言っていたが、その通りだ。俺も、葵の部屋に入るのは久しぶりだった。

「じゃ、あとでお前の部屋に行くぞ」
『え、やだ！！』
は？
「やだってお前……」
『お兄ちゃん、ヤサガシとかしそうだもん！！』
「しねえよそんなこと。なんだ。見られたらまずいもんでもあるのか？」
『うっ……』
あるらしい。
「なんだよ。まさかエロ本とか？」
『えっ』
「え？」
冗談だろ？　俺は食べていたトーストの屑を、ボロボロと床にこぼした。お、落ち着け。俺が動揺してどうする。
「……お、おい。はっきり言っておけよ今のうちに。なんか見られちゃまずいものがあるのか？」
『う、うん……』
葵は気まずそうに、下を向く。なんなんだその、見られちゃまずいものって。訊きたい。訊きたくて仕方がない。しかし
「わかった。それが何かは訊かないから、俺を部屋に入れろ。部屋に入ったら俺は、ＣＤにしか触らない。お前は俺を監視してればいい。な？」
『うん。お兄ちゃん、５秒で部屋から出てね。５秒だけだよ！　５秒だからね！』
どこの小学生だお前は。

こぼしたトーストの屑を掃除して、俺は葵の部屋へと向かう。葵の部屋は、俺の部屋の隣にある。葵は心配そうに、俺の後ろからついてきた。

「葵、ＣＤはどこに置いてあるんだ？」
ドアにかけられているピンク色のプレートを見ながら、俺は尋ねた。
楕円形のプレートには丸っこい字で、「あおいのへや」と書かれている。
『机の上に置いてあるよ。レンタルショップでもらった青い袋に入ってる』
「よし。じゃ、俺は机の上のそれを取ったらさっさと部屋から出るから」
『う、うん……』
葵の了解を得て、俺はドアノブに手をかけた。

開けてみると何てことはない、普通の女の子の部屋だった。他の女の子の部屋が、どんなのかは知らないが。
本棚には少女漫画らしきものがずらっと並び、その下にはハート形のクッションが置かれている。クッションの色は赤色だ。壁にかかっている時計もハート形で、かわいいっちゃかわいいが文字盤が見にくい。
妹はハート形が好きだったらしい。知らなかった。
『お兄ちゃん早く！』
急かされてハッとする。気づけば葵の部屋をぼーっと眺めていた。ベッドサイドに並んでいるアルパカや猫のぬいぐるみが、こちらを睨んでいる。ように見える。
俺は早足で葵の学習机のもとへ向かい、そこに置かれていたレンタルショップの青い袋を掴んだ。その袋の横に無造作に置かれていた本に、嫌でも目がいってしまう。その本のタイトルは、
【正しい恋のしかた５０　５分で分かる恋愛テクニック】

「お、おおお……」
『ちょっとお兄ちゃん！　何見てるの！？』
葵に怒鳴られ、俺はあわてて部屋を出た。
疲れた。恐ろしく疲れた。
１００m走の後みたいに肩で息をする俺の姿を見て、葵は眉をひそめた。
『見た？』
「……何を？」
葵は答えない。葵が言っていた見られちゃまずいものって、あの本のことだったんだろうか。
正しい恋のしかた
そうか。葵には好きな人がいるのか……。

08　好きなんでしょ

駅を少し下ったところにあるのレンタルショップは、それなりに混んでいた。新着のＣＤやＤＶＤのコーナーには、「貸し出し中です」の文字が並んでいる。俺は妹が借りていたＣＤを返却ボックスに突っ込もうとして、その返却ボックスがなくなっていることに気づいた。レジに並んで、直接返却しなくちゃいけないらしい。面倒だな、と思いつつレジに並んだ。

「お次のお客様どうぞー」

呼ばれて、俺は店員のもとへと向かう。胸元に、『研修中』の札をつけている女性店員だった。

「それでは、返却内容を、確認させて、いただきます」

マニュアルに、そう言えと言われているんだろう。が、あまりにも棒読みすぎて、学芸会の台本を読んでいる小学生のようだった。新人らしいといえば、新人らしいが。

葵が借りてきていたのは、邦楽のＣＤ２枚とＤＶＤが１枚の、合計３枚だった。

ＤＶＤも借りてきてたのかあ……なんて暢気なことを思いながら、俺はＤＶＤのタイトルを見た。そして、血の気が引いた。

そのＤＶＤのタイトルは、『イケメン王国　君もパラダイスに連れてってあげるよ』。

アダルトなＤＶＤでないことは、知ってる。これは、１年前にテレビでやってた連続ドラマだ。

それはいいのだが、このドラマの内容はタイトルの通り、かっこ

いいイケメンに囲まれてウハウハする女の子の話だ。無論、女性向けのドラマである。
レジの店員に、顔をチラ見された。ち、違う。俺は断じて、そういう趣味では……！
「い、いやあ。このドラマの主演の、椎名芽衣子（しいなめいこ）ってかわいいですよね！」
俺は、イケメンに囲まれてウハウハする役をやっている女優の名前を口に出し、ごまかそうとした。しかし、不自然すぎて余計に怪しい。
俺が慌てふためく様子を、葵はニヤニヤと見つめていた。く、くそ。

やっとの思いでレジから離れ、とぼとぼと出口に向かって歩いていると
「あれ？　夏樹君？」
後ろから声をかけられた。
『あ。美鈴ちゃんだ』
俺よりも先に、葵が彼女の名前を言う。俺の名前を呼んだ美鈴は、ぎこちない笑顔をこちらに向けていた。葵の葬儀の時にはまとめていた長髪を、今はおろしている。白色のワンピースに黒のカーディガン、足元には装飾の少ない薄茶色のミュールという、いつも通りの大人しい格好だった。
「何か借りに来たの？」
「いや。葵がレンタルしてたのを、返しに来ただけ」
「そうなんだ……」
笑顔をが更にぎこちなくなる。死んだ妹（あおい）の話を出すのは、あまり良くないのかもしれない。相手に気を遣わせてしまう。
美鈴の抱えている青色の袋を見ながら、俺は笑った。
「美鈴は？　何か借りに来たのか」

「ううん、私も夏樹君と同じで、返却しに来たの。返却期限が今日だったから」
『あーっ！！！』
隣にいた葵にいきなり叫ばれて、俺は飛び上がった。そんな俺を見て、美鈴が首をかしげる。
「どうかした？　夏樹君」
「あ、いや……」
どう弁解しようかと考えている俺の横で、葵が叫ぶ。
『思い出した！　先週ここに来た時ね、美鈴ちゃんに会ったよ！！
一緒にＤＶＤ探したんだ！』
「え！？　じゃあ美鈴もイケメン王国借りてんの！？」
思わず素で反応してしまってから、しまったと思う。美鈴は顔に「？」を張り付けたまま、俺の方を見ている。
「あ、ごめん。あの、……葵がそんな感じのＤＶＤを借りてたんだよ」
俺が小さな声でそう言うと、美鈴は思い出したようにくすくすと笑った。
「そうだった。先週、ここで葵ちゃんに会ったのよ」
「え！？　そうだったのか！」
ついさっき葵から聞いた話だが、知らないふりをする。わざとらしい演技になってしまったと思ったが、美鈴は構わずに続けた。
「葵ちゃんが、見たいＤＶＤが見つからないって言ってたから、一緒に探したの。そういえば、そんなタイトルのＤＶＤを探したっけ」
「なんだ。じゃ、美鈴は借りてないのか」
『なによ、そのほっとしたような顔はー』
ぶうぶう言ってる葵は無視して、俺は美鈴に笑顔を振りまいた。
美鈴は俺の顔を、心配そうに見つめてくる。
「……夏樹君、大丈夫？　無理してない？」
「あ。大丈夫だよ、うん」
「そっか」

どうしても、空気がぎこちなくなってしまう。それを横で見ていた葵は、にやりとした。
『お兄ちゃん、美鈴ちゃんのことが好きなんでしょ』
「ばっ！！　お前っ……」
「な、夏樹君？」
何もない空間を見ながら叫んでいる俺を見て、美鈴が訝しげな顔をする。
「あ、いや大丈夫だよ。あはは、じゃあな美鈴」
不思議そうな顔をしている美鈴を残し、俺は一人でそそくさと店を出た。

上を見上げると、葵が落ちたビルの屋上が遠くに見えた。

09　買って！！

レンタルショップからの帰り道で、葵が突然『あ！』と叫んだ。
「なんだ？」
周囲の人には聞こえないよう、なるべく小声で喋る。駅前の大通り、しかも帰宅ラッシュの時間でもあったので、そこそこの人が歩いていた。一刻も早く家に帰りたいのか、無表情で足を動かしている人々が目に付く。そんな人たちとは対照的に、葵は興奮した様子できゃーきゃーと叫んだ。
『お兄ちゃん！　今日、発売日だった！』
葵は俺の肩をたたくジェスチャーをしているが、その手は俺の肩をすり抜けた。俺はそんな奇妙な光景と、葵の叫び声を聞きながらため息をついた。
「……なんの発売日だって？」
『あたしが大好きな、漫画の最終巻の！！』
――今の葵に擬音をつけるなら、「キリッ」だろう。……なんて、どうでもいい事を考えている俺に、葵は叫んだ。
『お兄ちゃん、買って！！』
「はあ！？」
大きな声で反応してしまい、近くを歩いていた人に顔を見られた。俺は俯き、口元を右手で隠しながら呟く。
「なんで俺が……」
『だって気になるもん！　最終巻だよ！？　あたし、すっごく楽しみにしてたのに！！』
「……」
『最終巻読まなきゃ、成仏できないかも！！』
そんなことを言われたら、買いに行かねばなるまい。

近くにあった小さな本屋に、足を踏み入れた。雑誌を立ち読みしている人たちの間を潜り抜けながら、相変わらず一人で騒いでいる葵に尋ねる。
「その本、どこにあるんだ？」
『少女漫画のコーナー！』
「……」
葵が読んでる漫画ならまあ、少女漫画でもおかしくない。が。
「それを俺が買うのか？」
『だって、私はもう買えないもん。憑依したって、お兄ちゃんが買うのには変わりないよ』
そりゃそうだが。
「で、本のタイトルは？」
『愛しちゃう、恋しちゃう！』
「……は？」
『本のタイトルだよ。【愛しちゃう、恋しちゃう！】』
ぐらりと、足元の床が歪んだような気がした。とりあえずその場で立ち止まり、雑誌の表紙を見ているふりをする。俺の体は、傍(はた)から見ても明らかに震えているだろう。
恥ずかしさと、恐怖で。
「お、俺に、そんなタイトルの本を買えと？」
『うん！』
そんな嬉しそうな顔をするな。
「ＤＶＤの件といい、どれだけ俺に恥ずかしい思いをさせる気だ、お前は」
『大丈夫だよお兄ちゃん！　お兄ちゃんのエロ本の表紙の方が、よっぽどエロかったよ！』
そういう問題じゃない。

少女漫画の新刊コーナーを、一度だけふらりと素通りした。素通

りしつつ、ブツはしっかりチェックする。最前列の一番目立つコーナーに、それはあった。よっぽど人気のある漫画だったらしい。【愛しちゃう、恋しちゃう！　感動の最終巻（フィナーレ）！！】と書かれたポップが、漫画の横に立っていた。

「うおお……」

表紙を見て、思わず変な声が漏れた。どう見ても、少女漫画のタッチで描かれている。少女漫画なんだから当たり前っちゃ当たり前だが、目を大きく描きすぎだろ、これ。顔面の半分くらいの面積を、目が占めてるんじゃなかろうか。

『お兄ちゃん、早く早く！！』

葵に急かされ意を決した俺は、平積みされているその本を1冊だけひっ掴み、早足でレジへと向かった。今までモタモタしていたものの、恥ずかしいことはさっさと終わらせるに限る。

レジの店員は、大学生くらいの男だった。女性店員に見られることを考えれば、精神的ダメージはまだ少ない。

カウンターに本を置き、小銭を探している俺に店員が話しかけてきた。

「この漫画、いいっすよね。俺も家に帰ったら読もうと思ってて」

お前も読んでんのかよこの野郎。

『お兄ちゃんも読んでみたら？　絶対ハマるよ』

隣でその様子を見ていた葵が、くすくすと笑った。

10　身体貸して！！

ものすごく長い旅に出ていたような気がする。今日はひどく疲れた。
「……ただいま」
玄関で靴を脱ぎ、早足で自分の部屋へと向かう。
本屋でこれだけ疲れたのは、生まれて初めてだ……。
自分の部屋に入った俺は、買ってきた少女漫画を葵に手渡そうとした。しかし、
『あたし、読めないんだけど……』
困ったように葵は笑った。

そうだった。葵はもう、本を持つことすらできないんだった。

夕飯まではまだ時間があったので、今のうちに読んでおくことにする。俺は椅子に座ると、本屋の紙袋から例の漫画を取り出した。葵は俺の後ろに立つ。
「じゃ、俺がページをめくるから。めくってほしいときは、『めくって』って言えよ」
『うん！』
ということで、早速1ページ目をめくった。

いきなり、キスシーンだった。

「うえあ……」
少女漫画に免疫のない俺は、いきなり現れたそのシーンに気持ちの悪い声を漏らした。どうも、主人公とその彼氏のラブラブシーンらしい。葵は俺に一切構わず、黙々と漫画を読んでいる。

『めくってー』
言われた通り、次のページをめくる。どでかい目をした女の子が、口元に手をあてて「どうして……？」と言っている。あれ？　さっきキスしたのは彼氏じゃなかったのか、これ。
どうして？　に対する男の回答は、「好きだから、キスしたくなった」。
「う、うおあ……」
『お兄ちゃん、うるさい』
葵に言われて、黙る。それにしても、なんなんだこの漫画は。
めくってと言われてページをめくるのを、何回か繰り返した。そして、なんか疲れたなあ、と思った矢先だった。
『あーもう！　いちいちいちいち、めくってって言うの面倒くさっ！！』
葵も同じことを思っていたらしい。いらいらした声で、
『お兄ちゃん、身体貸して！！』
「え！？」
次の瞬間、俺の目の前は真っ暗になった。

目が覚めると、俺は泣いていた。
「は……？」
後ろにいるであろう葵の方を見ると、葵もめちゃめちゃ泣いている。
『やばい。この最終回はやばいよおー』
……どうも、漫画の最終話に感動したらしい。で、憑依してたせいで俺まで泣いていると。
俺は服の袖で涙を乱暴に拭いながら、言った。
「満足したか、おい」

『うん』
それはよかった。しかし俺にも言いたいことがある。
「お前、勝手に憑依するなよ……」
『勝手じゃないもん。貸してって言ったもん』
確かに、憑依する寸前に『貸して！』とは言っていた。が、
「俺、返事も何もしてなかっただろうが！！」
『いいじゃん、ちょっとくらい』
葵は涙を拭きながら、けらけらと笑った。

今日、分かったことがある。
葵が憑依しようと思えば、無理やりにでも憑依できるということだ。つまり、

葵が憑依したいと思ったとき、俺には拒否権が、ない。

11　明日は

本日2回目とはいえ、憑依されるのはやっぱり慣れない。

晩飯にチンジャオロースを出された俺は、一瞬辟易した。大嫌いなピーマンが、山のように積まれている。しかしそれを見た葵は、目を輝かせた。

「……いいか。ちゃんと俺のふりするんだぞ。余計なことは言うなよ。お前はただ、チンジャオロースを食べればいいんだ。分かったな？」

小声で釘をさすと、妹は超のつく笑顔でこくこくと頷いた。

『じゃ、お兄ちゃん。身体借りるね！』

その声と同時に、俺の意識は押しつぶされた。

暗闇から意識が戻り、俺はハッとする。目の前には、チンジャオロースの油の跡だけ残った皿。視線を上げると、呆けた顔で俺を見ている母さんと目があった。

「夏樹、いつの間にそんなにピーマンが好きになったの？」

俺は隣にいるであろう妹の方を見る。葵は満足したのか、お腹をさすりながら椅子にふんぞり返って座っている。……よっぽどおいしそうな顔で食べたんだろう。いつもは鼻をつまみながらピーマンを処理している俺が、いきなり美味しそうにムシャムシャ食べたら、不自然に思われて当然だ。

「……まあ、いつの間にか食べられるようになったんだよ。大人の味覚に目覚めたんだ。苦いのが素敵な野菜だね、うん。はっはっは」

我ながら意味不明な弁解をして、席を離れようとした。それを見

た母があわてて、
「明日は？　何が食べたい？」
『肉じゃが！！』
葵が嬉しそうに言ったのを聞き取って、俺はほほ笑む。そして、言う。
「ハンバーグ。あと、にんじんのグラッセ」

『肉じゃがって言ったじゃん！　お兄ちゃん、ちゃんと聞いてた？』
俺の部屋に入るなり、葵はむくれながら言ってきた。
『あたしがにんじん嫌いなの知ってて、わざとにんじんって言ったんでしょ！』
「当たり前だ。そう毎日毎日憑依されてたまるか。明日の晩飯は俺が食う」
『じゃ、明日のお昼ご飯は私が食べるから』
「どういう理屈だよ、それ！」
俺がベッドに寝転がると、葵がベッドの端、俺の足元にちょこんと腰かけた。ベッドは、1人分の重さしか支えていないけれど。
「……チンジャオ、美味かったか？」
俺が天井を見ながら訊くと、葵は頷いた。
『おいしかったよ。お兄ちゃんの身体だと、いっぱい食べられるんだね。あたし、生きてた頃はあんなにいっぱい食べられなかったよ』
「そりゃお前、胃袋の大きさが違うんだよ」
『そっかあ……』
珍しく、葵が黙りこむ。俺は上半身を起こした。ベッドが軽く軋む。
「母さんの様子はどうだった。お前がチンジャオ食べてる時とか」
『目を丸くして見てたよ。葵みたいな食べ方するのね、って』
その言葉を聞いてギクッとする。
「お前、どういう食べ方したんだ？」

『普通だよ。普通に食べたつもり。とにかく無言で食べた。そういう約束だったでしょ？』
俺は頷いて、それから考える。母の勘なのか、葵が憑依してるとまでは思わなくても、葵のようだ、とは思ったらしい。それはピーマンをおいしそうに食べたからなのか、それとも……。
俺の身体に葵が憑依する。それをばらしたら、親はどう思うんだろう。俺を通して葵と話したいと思うのか。それとも、タチの悪い冗談で通してしまうのだろうか。

そこまで考えたところで、携帯が鳴った。――美鈴からだ。

「……葵。ちょっと席をはずせよ」
『え、なんで？』
「いいから！」
不思議な顔で部屋を出ていく……というか、すり抜けていく葵の姿を確認してから、俺は通話ボタンを押した。
「もしもし？」
「あ、夏樹君？　今、大丈夫？」
俺はもう一度、部屋を見渡す。葵は、いない。
「大丈夫だよ」
「あの、今日レンタルショップで会った時、夏樹君の様子が変だったから。……なんて言えばいいのか、分からないけど」
「ああ」
俺は苦笑して、壁にもたれかかった。
「大丈夫だよ。暑さにやられて、ちょっと頭が痛かっただけなんだ」
「そっか。なら、いいんだけど……」
安堵した空気。それから沈黙。そもそも美鈴は、自分から電話をかけたりするのが苦手だったはずだ。本当に気を遣わせたなあ、と思う。
「……夏樹君、明日は何か予定ある？」

「え？　いや、特に何も……」
また、沈黙。美鈴は、自分から誰かを誘うのも苦手な子だったはずだ。俺は思わず笑う。
「美鈴も暇なら、どっか行こうか？」
俺の方から提案すると、美鈴は嬉しそうに、笑った。

『明日、美鈴ちゃんとデートなの？』
電話を切ると、隣から声がした。慌てて左隣を見ると、葵の頭だけが、壁から生えてこちらを見ていた。
「おわあっ！！」
ホラー映画さながらのそのビジュアルに、俺は声を出す。葵は笑いながら、全身をするんと壁から出した。というか、すり抜けたというか。
『いやあ、すり抜けられるって便利だね！！　頭だけ出したら、盗聴もできちゃったりね！』
「お、お前……」
『明日、美鈴ちゃんとデートなんでしょー』
「ついてくるつもりか！」
『ううん』
葵は少しさみしそうに、けれども無邪気な笑顔で首を振る。
『あたしは、明日は一人で行動するよ。いつもお兄ちゃんの後ろにいたら、お兄ちゃんもストレスたまるでしょ？』
「……」
こいつ、そういうところで気を遣う奴なんだよな。
『ていうか、お兄ちゃんとずっと一緒だとあたしのがストレスたまるしさあ』
「ああ！？」
『えへへ、嘘！　冗談！』
葵は舌をペロッと出すと、『いつも悪いから』と、小さな声で付

け足した。
『だから明日は、美鈴ちゃんと遊んで来い！　あたしが許す！』
「お前、なんでそんなに偉そうなんだよ！」
『へへーんだ』
妹はあっかんべーをすると、そのまま自分の部屋にすり抜けていった。

俺はベッドの上に仰向けに寝転がり、天井を見上げた。
――明日。
明日は、どこへ行こうか。

12　勘違いしないでよね！

『お兄ちゃん、今日はどこに行くの？』
出かける支度をしている俺にそう訊いてきた葵は、ベッドの端に腰掛けていた。もちろん、俺のベッドだ。どうもそこが気に入ったらしい。
「映画を観に行ってくる」
俺は青色のTシャツに着替えながら答えた。
『何の映画！？』
「それは秘密」
『えー、いいじゃん教えてくれたってえー』
「そういうお前こそ、今日は一日何をするつもりだ？」
パジャマのズボンを脱ぎ始めた俺を見て、さっと視線を横にそらした葵は
『ちょっと色々……』
言いにくそうに、そう言った。俺は真新しいジーンズを穿いて、ジッパーを上げる。
「もうこっち向いても大丈夫だぞ。――で、なんだよ色々って」
『色々って言ったら色々なの！　お兄ちゃんになんか、教えてあげないもんねーだ！』
「なんだ、急に反抗期か？」
俺が笑うと、妹はうなだれた。
『そんなんじゃ、ないもん……』
しゅんと萎(しお)れて下を向いているヒマワリのような葵を見て、俺は笑う。
「なんだぁ？　もしかして、俺が美鈴とデートするのに妬いてるとか？」
『えっ？』
「え？」

『……』
そして、この沈黙である。
「お、おい。葵……？」
『ち、違うから！　別にお兄ちゃんのことが好きだとかそんなんじゃないんだから、勘違いしないでよね！！』
「お、お前そのセリフ、ツンデレが好きな相手（やつ）に言う『あーもう、うるさい！！』
葵は俺の枕をこちらに向かって投げつけようとした。が、葵の手は枕をするりとすり抜けて、宙を舞う。
それに気付いた葵は、がっくりと肩を落とした。それから、枕をすり抜けた左手を、右手で包み込んだ。
『……あたしだって、本当は好きな人いたんだから。お兄ちゃんじゃ、なくて』
だけどもう、葵はその相手に気持ちを伝えることすらできない。

少しだけ、悪ふざけが過ぎた。妹の様子を見て、たちまち後悔する。これで何度目の後悔だろう。
俺は葵の目を見ながら、言った。
「お前の好きな相手が俺じゃないことくらいは、俺でもわかるよ。茶化しすぎた。ごめん」
『……別にいいけどさ』
葵はどさっと、俺のベッドに倒れこんだ。ベッドは、軋まない。俺は机の横に引っ掛けてある黄緑色のリュックから、使い古してボロボロになっている財布を取り出した。
財布の中身を確認している俺を見て、葵が笑う。
『もしかして、あたしが映画を観に行ってもタダになるんじゃない？』
「だろうな。……ついてくるなよ？」
『分かってるってば、しつこいなあ。お兄ちゃん、シタゴコロがスケスケだよー？』

「お前、そう言うことを恥じらいなく言うなよ！　それにそういうつもりはないし！　ただ映画を観に行って飯食ってくるだけだし！」
『お兄ちゃん、焦りすぎ』
妹に笑われて、俺は我に返る。
何を焦ってんだ、俺は。

美鈴とは幼馴染であって、彼女ではない。
彼女が辛いときに、少しだけ側にいてやったことがあるくらいで。
俺は美鈴の彼氏だとか、そんなんじゃ、ない。

母さんと葵に玄関で見送られ、俺は外に出た。
朝なのに日差しが強い。今日は暑くなりそうだ、と思った。

13　要らない子

「私、避妊に失敗して、たまたまできた子供なんだって」
美鈴が消え入りそうな声でそう言ったのは、今から2年前。俺たちは中学2年生で、季節は秋だった。

美鈴の家は、なんていうか複雑だった。酒飲みの父親と、パチンコ通いの母親。その2人がしょっちゅう喧嘩して、美鈴に八つ当たりすることも多かったらしい。それに耐えきれなくなった時、美鈴はいつも近所の公園に避難していた。夜でも構わず、一人で。
たまたまそれを発見した俺は、美鈴に声をかけた。こんな時間に一人で何してんだ、危ないぞと。
ブランコを小さく揺らしながら座っていた美鈴は、その動きを止めた。それからこちらを見てほほ笑んだ。頬には、涙の流れた跡がはっきりと残っていた。

「私は、要らない子だったんだよ」

それだけ言うと、美鈴は両手で顔を覆い、泣き始めた。

あの時、俺はなんて声をかけただろう。隣のブランコに腰掛けて、話したことは覚えている。けれど、会話の内容までは思い出せなかった。
その日からちょくちょく、夜の公園で美鈴と二人で話をするようになった。もともと幼馴染だったし、仲はよかった。

付き合おうと言ったことも、言われたこともない。
ただ、友達よりも少しだけ深い関係。

そんな感じだ。

「夏樹君！」
映画館の前で手を振る美鈴に、手を振り返す。子供向け映画の公開日だったせいか、その映画のパンフレットを持った子供がやたらと多い。俺は、足元をうろつく小さな子どもを蹴ってしまわないように気をつけながら、美鈴の方へと急いだ。
「ごめん。待たせたか」
「ううん。本屋に用事があったから、私が予定よりも早く来ちゃっただけ。気にしないで」
美鈴は映画館の向かいにある、大型の書店を指差しながら笑った。
「んじゃー、入ろうか」
「うん」
お互い手を繋ごうともせず、二人で館内に入った。

観に行ったのは、最近流行りのアクション映画だった。孤独な女スパイが恋をするの話で、かっこいいとか切ないとか、とにかく評判だった。
だからハズレはしないだろうと思って観に行ったのだが、甘かった。

物語の佳境で、主人公の恋人が死んでしまったのだ。
しかも、自殺だった。

気まずい。これは気まずい。隣を見ると、やはりというかなんと

いうか、美鈴は泣いていた。まあ、感情移入して泣いてるだけだろうけど……。
俺は自分自身の中にある気まずさを紛らわせようと、売店で買っていたメロンソーダを飲み干した。すると、ズゴゴゴゴーっという情けない音が館内に響き渡り、感動中の空気を台無しにしてしまった。
「……」
余計に気まずい思いをしている間に、映画は終わった。

「すごくよかったね、この映画」
売店でパンフレットを見ながら、美鈴がほほ笑む。
「ああ。かっこよかったな」
無難な返事で茶を濁す。あまり、「死ぬ」ことに関する話はしたくなかった。
美鈴も同じようなことを思っていたのか、恋人が死ぬシーンについては一切触れてこない。
俺は腕時計で時間を確認する。ちょうど、昼過ぎだった。
「……なんか食いに行くか。何が食べたい？」
「なんでもいいよ」
「それが一番困るんだよなあ」
俺たちは笑いながら、映画館を出た。

やっぱり、手は繋がないまま。

14　なんて言えばいいのか

「夏樹君って、お箸の持ち方が綺麗だよね」
ファミレスでとんかつ定食を食べている俺を見ながら、美鈴が笑った。そういう美鈴は、ペペロンチーノを器用に、そして綺麗にフォークに巻きつけている。
「そうか？」
俺は自分の箸の持ち方を見ながら、首をかしげる。わかってないんだね、と美鈴は笑った。
「なんていうか、お手本みたいな持ち方してるよ。そういえば夏樹君、鉛筆を持つ時も綺麗な持ち方してたもんねえ」
そう言われて、気付く。

葵の箸の持ち方には、少しだけ癖があった。
親指を少しだけ、曲げるのだ。

だからって別に不格好というほどでもなく、指摘されるほど目立った癖でもない。だが、俺の箸の持ち方とは少しだけ、そして明らかに違う。

「葵みたいな食べ方するのね」

あれは食べ方じゃなくて、箸の持ち方のことだったのか……？
葵がチンジャオロースを食べている時、母はその違いに気付いたのだろうか。

「……夏樹君？」
顔を上げると、美鈴が不安そうな顔でこちらを見ていた。気づけ

ば、箸を止めたまま黙り込んでしまっていた。
「あ、ごめん、何でもない」
俺がへらへらと力なく笑うと、美鈴は少しだけ俯いた。
「……ごめんね。なんて言えばいいのか、分からなくて。なのにこうやって、会ってもらっちゃって……」
なんて言えばいいのか分からない。それはやはり、葵のことだろう。
「いや、俺なら大丈夫だよ。今日だって誘ったのは俺の方だし、何の映画を観るのか決めたのも俺の方だしな」
俺は笑いながら、とんかつの下にある千切りキャベツを箸でつついた。均等な細さのそれは、恐らくは業務用のものだろう。
「――葵のことも、なんていうかまだ、実感がないんだよ」
葵の幽霊がはっきりと見えてるせいで、とは言えなかった。美鈴は俺の言葉を聞いて、困ったようにほほ笑んだ。その笑顔を見て、俺はキャベツをつつくのをやめる。
「な、この話はやめよう。夏休みだけどさ、美鈴は何して過ごしてんの？」
「えっ、私？」
急に話を振られた美鈴は、困ったように宙を仰いだ。必要以上にくるくると、パスタの中でフォークを回す。
「……図書館でいることが多いかな。ほら、私の家、あんまり空気が良くないから」
「そっか……」
俺の方も、なんて言ってやればいいのか分からない。美鈴はパスタの中からフォークを引っ張りだし、一口では食べきれないほどに巻きついた麺を見て笑った。
「最近の図書館って、結構暑いんだよ。節電しなきゃだし」
「だろうな。ここも、あんまり空調は効かせてないみたいだもんな」
俺は天上にある通風機を見ながら言う。それから、熱々のとんかつに目をやった。とんかつ定食じゃなくて冷やしうどんにすればよ

かったな、と思う。

店の大きな窓から、外を見た。
小さな女の子達が自転車で走って行くのが見える。

葵は今頃何をしているんだろう。
そんなことを、思った。

15　お兄ちゃんにしか

ファミレスを出た後、駅前にあるショッピングモールをしばらくブラブラした。
２段式の小さな弁当箱を見ていた美鈴が、こちらを振り返る。
「夏樹君さ、もうすぐ誕生日じゃない？　何か欲しいものとかあるの？」
さすがにその弁当箱は小さすぎるだろ。と、内心で突っ込みながら俺は笑った。
「ストレートに訊いてくるな。……欲しいものか。特にないかなあ」
「それが一番困るんだよねえ」
苦笑する美鈴。なんだかお互い、変に気を遣ってたような気がする。
帰り道も、無言になることが多かった。無言になっては話題を考えるのを繰り返し、２人で苦笑した。
「じゃあまたな」
「うん、今日はありがとう」
美鈴の後姿が見えなくなってから、俺は小さくため息をついた。

……楽しかったんだけど、な。

自分の影を見ながら、とぼとぼと歩く。映画の選択ミス。というよりも、今は何をやっても、お互い気を遣うことになる気がする。
俺は大きなため息をつきながら、自宅のドアを開けた。途端に、玉ねぎを炒めてるにおいが鼻につく。そっか。そういえば今日の晩飯は、ハンバーグがいいって言ったんだった。
「ただいまー……」
『お兄ちゃん！　お兄ちゃん！』
帰宅するなり、葵が音もなくドタドタと階段を下りてくる。

「なんだ？」
『お帰り！　お帰りなさい！！』
だからどうしてそんなにハイテンションなんだ？

俺がにんじんのグラッセを食べている様子を、葵は複雑な顔で眺めていた。まあ、葵にとってはにんじんは「嫌なもの」だが、俺の顔まで嫌な顔して見るなよ。
父はいつも通り無言。夕刊を見ながら、ロボットのように箸だけを動かす。母は俺と父の顔色を疑いながら、箸を進めている。……いつから俺の家は、こんなに会話のない家になったんだろう。
『お兄ちゃん、ハンバーグ一口ちょうだい』
隣に座っている妹が声をかけてくるが、無視する。両親が目の前にいるのに、会話するわけにもいかない。
『ねーねー』
俺は無言で首を振る。そのジェスチャーの意味に気付いたらしく、葵はむすっとしながらも黙り込んだ。俺が首を振ったのを見て、母が不安な顔をする。
「夏樹、どうしたの？」
「ああ。えっと……ちょっと頭が痛いだけ」
俺は笑いながら、さっさとハンバーグを処理する。作ってくれた母には悪いが、味はよく分からなかった。

いつのまに、俺の家はこんなに空気が薄くなったんだろう。

自分の部屋に戻ると、葵も部屋に入ってきた。そして、ニヤニヤしながら
『お兄ちゃん、デートはどうだったの？』
俺はため息をつく。こいつは何を期待してるんだろう。

「別に。映画見て、飯食って、終わり」
『それだけー！？』
意外だと言わんばかりの葵の顔に、俺は仏のような顔でほほ笑む。
「他に何をするんだ？　ん？」
『うっ……』
さすがの葵も、それ以上は言えないらしい。気まずそうに身体をもじもじさせて、ベッドの端に腰掛けた。もはやそこは、葵の特等席になっている。
俺は学習机の椅子に腰かけて、葵の方を向いた。
「お前は？　今日一日、なにしてたんだよ」
訊いた途端、葵の顔が曇った。
『……別になにも』
「え？　ずっと家にいたのか？」
『外にいた、けど……』
「けど？」
葵はしばらく考え込んでから、顔をあげた。妙に薄っぺらい笑顔を張り付けて。
『あのね、今日分かったんだけど！　私、お兄ちゃんにしか憑依できないみたい！』
「え？」
俺は目を丸くする。
「お前、他の人に憑依できるか試したのか？」
『うん、ちょっとだけ。だけど、全然だめだった。それにやっぱり、お兄ちゃん以外の人には私の姿は見えないみたい』
わざとらしく明るい声で、葵が言う。いつも以上に早口になってるそれは、何かを隠してる時の葵の癖だ。昔から、そうだった。
「……葵？」
『あーあ。お兄ちゃんにしか憑依できないなんて、どういう嫌がらせだろうね』
「おい」

『あははっ！　あたし、もう寝る。おやすみお兄ちゃん』
俺の制止を無視して、葵は部屋から出ていった。

16　お兄ちゃんの馬鹿

夜中、ふと目が覚めた。今夜は暑くて寝ぐるしい。俺は上半身を起こして、扇風機の前に座った。風量を「強」にしているものの、生ぬるい風が勢い良く吹いているだけで、ちっとも涼しくない。

……冷たい麦茶でも飲もうか。俺はため息をついて立ち上がった。

右肩をぼりぼりと掻きながら、廊下に出る。そのまま葵の部屋の前を通り過ぎようとした時、

『……ひっ、う……』

しゃくりあげるような声が、はっきりと聞こえた。

――葵が、泣いてる？

俺はしばらく考えて、だけどやっぱり気になって、ドアを小さくノックした。あまり大きな音を立てると、両親に気付かれる。

「……葵？」

小声で声をかけると、先ほどまで聞こえていた嗚咽がぴたりと止まった。

「俺だけど。大丈夫か？」

返事がない。その代わりに、鼻をすする音がかすかに聞こえた。

どうするべきなんだろう。このままそっとしておいた方がいいんだろうか。

そんな意志とは裏腹に、俺の右手はドアノブへと伸びていた。

「葵。入ってもいいか？」

確認するが、やはり返事がない。しかし葵の性格からして、嫌なら嫌と言うはずだ。俺は葵の返事を待たずに、ゆっくりとドアを開けた。

葵は、自分のベッドの上に座っていた。涙を止めようとしているのか、必死になって目をこすっている。窓から差し込む月の光が、葵の部屋をわずかに明るくしていた。俺は、壁にかかっているハート形の時計で時刻を確認する。深夜、２時過ぎ。

「眠れないのか？」

声をかけながら、葵の方に近づく。すると、葵が首を振った。

『眠れないとかじゃないの。眠らないんだよ、幽霊は』

「え……？」

初めて聞いた。それじゃあ今まで、葵は一人ぼっちで夜を過ごしていたということか？

俺は足音をたてないようにゆっくりと歩き、葵の横に立った。

「……隣、座っていいか」

無言でうなずく葵。俺は黙って、葵の横に腰掛けた。夕方、葵の様子が明らかにおかしかったのを思い出して、訊く。

「今日、なんかあったのか？」

俺が訊くと、葵はまた泣き出した。俺の妹はこんなに泣き虫だっただろうかと、ぼんやりと思った。葵はしばらくぼろぼろと涙をこぼしてから目をこすり、ため息をつくように深呼吸をした。そして、

『……す』

「す？」

『好きな人に……会いに、行ったの』

「――うん」

次の言葉は、予想ができた。きっと、葵の姿は

『その人に、あたしの姿は見えてなかった』

あたしの姿はお兄ちゃんにしか見えない。そう言ったのは、そのせいか。

『あたし、好きだって、――好きでしたって、言えなかった……！』

そこまで言うと、葵はわんわん泣きだしてしまった。俺はどうすればいいのか分からず、葵の横で黙って座っているだけだ。――あ

あ、そういえば

美鈴とも、こんな風に過ごしたことがあった。

「……葵。俺の身体に憑依して、その人に好きだって言って来いよ」

俺が提案すると、葵はパッと顔をあげた。それから

『お兄ちゃん、馬鹿なの？』

眉間にしわを寄せた。

「え？」

『お兄ちゃんの身体で、男の子に好きだなんて言ったらどうなると思うの？』

――俺は想像した。俺の身体で、男の子に好きだと言ったら、

それはなんていうか、違う物語が生まれそうだ。

「すまん。やっぱりやめといた方がよさそうだ」

『お兄ちゃんの馬鹿』

はっきりとそれだけ言うと、葵はまたもやわんわん泣きだした。

恋人同士とかそんな関係ならともかく、目の前で泣いてるのは実の妹で、だからそんなことするつもりもなかったのだけれど、俺はここにきてようやく気が付いた。

俺は葵を、例えば抱きしめてやったり、手をつないでやったり。

そういうことが、できないのだと。

憑依だって、葵が俺の中に入ってる間は、俺の意識はなくなってしまう。つまり、憑依中の出来事を共有することはできないのだ。

俺は結局、葵に何もしてやれない。

今更そんなことに、気付いた。

17　俺に憑依しろ

葵の部屋に来てから、どれくらいの時間が経ったのだろう。
葵は泣きやまないし、俺は何もしてやれない。
さりげなく、ハート形の時計で時刻を確認した。午前3時過ぎ。
夜中なのか、朝なのかも分からない時間。
「……その、好きだった奴に、自分の気持ちを伝えたいのか？」
葵の机に置いてあった恋愛の本のことを思い出しながら、小さな声で訊く。葵は鼻をすすりながら、
『分かんない』
「分かんない？」
『どうしたいのか、自分でも分かんないの。でも、あたしは』
そう言ったかと思うと、ぼろぼろと涙をこぼした。
『あたしはここにいるのに、そこにいたのに、誰にも気づいてもらえなかった。……今日ね、色んな人に声をかけたの。だけど、あたしの姿は誰にも見えてない。お母さんにも、お父さんにも見えてなかった。お兄ちゃんに、しか、見えてないの』
寂しかった、と呟くように付け足した葵の言葉は、薄暗い部屋の中に溶けた。
『もしもあたしの姿が、お兄ちゃんにも見えなくなったら？　そしたら、あたしはっ……』
そうなったら葵は？

葵がいつも『お兄ちゃん！　お兄ちゃん！』と叫んでいた理由を、ようやく理解した。

怖かったんだ。自分の姿が、誰にも見えなくなることが。
だから確認した。自分の姿が、俺に見えているかどうか。声が、聞こえているかどうか。

――空元気、だったのか？

俺が夜眠っている間、葵は一人で何を考えていたんだろう。

葵は泣きじゃくり続けている。

俺は答えられない。気の利いたセリフも思いつかない。俺は元々霊感があったわけでもないから、葵の姿がこれからもずっと見えるかどうかも分からない。

俺、情けねえ……。

『――お兄ちゃん、なんで泣いてんの……』

「うっわ……」

泣いてしまったことに自分で驚き、そして焦った。

俺は腕で乱暴に涙を拭うと、葵の方を見た。

「葵、俺に憑依しろ」

『え？』

俺は、壁に貼り付けられている半紙を見る。葵が小学生の時に書いた、書き初めだ。校内で特別賞に選ばれ、しばらく廊下に張り出されたと自慢していた。

書いてある言葉は――……「希望」。

「俺に憑依して、手紙を書けばいい。俺の身体を使ってるとはいえ、お前が憑依して字を書いたら、お前の筆跡になるんじゃないのか？」

葵は泣き腫らした目で俺の方を見る。……幽霊でも、泣いたら目が腫れるらしい。

『そうなの、かな……？』

「やってみなきゃ分かんないけど、多分」

俺は両腕を組む。ラブレターなんて俺はもらったことないけど、

「好きな奴に手紙を書け。で、その手紙を俺が渡してやる。死んだ妹の机から出てきたって言えば、どうにかなるだろ。レターセットとか、持ってるか？」
『持ってる、けど……』
葵は戸惑ったように、視線をさまよわせている。
「けど？」
『なんて書こう？』
それは知らん。
「お前の好きなように書けばいいんだよ。あ、『好きでした』とか、過去形にはするなよ。あくまで死ぬ前に書いた手紙ってことにするんだから」
俺が笑うと、葵も笑った。少しだけ、部屋の中が明るくなったような気がする。
「んじゃ、さっさと憑依して書けよ」
『うん。お兄ちゃん、トイレは大丈夫？』
「は？」
いきなり訳の分からない質問をされて、俺は間抜けな返事をした。
葵は笑いながら、
『だってあたし、お兄ちゃんの身体でトイレに行きたくないもん。なんか、変なのついてるし』
「変なの言うな」
俺は葵の頭をこづくジェスチャーをする。それから二人で、笑った。

18　目つきが怖いよ

目が覚めると朝だった。俺はちゃんと自分の部屋で寝ていて、足元には葵が座っていた。

俺は記憶を探る。――憑依して手紙を書けと言ったのが、最後の記憶だった。あのあと、葵は手紙を書いたのだろうか。

「葵。……手紙、書いたのか？」

睡眠時間がいつもより短いせいか、妙に眠い。俺は生あくびをしながら、足元にいる葵に尋ねた。

『う、うん。机の上』

「どれ」

俺が立ち上がると、葵が早口で言った。

『中身は見ないでね！！』

「分かってるよ」

俺は苦笑しながら、自分の机の上にある封筒を手に取る。淡いピンク色の封筒。そこに書かれている文字はやっぱり、葵の筆跡（もの）になっていた。

「ふーん。……葵の好きな子の名前は岡田君、かあ」

『な、なによー……』

「別にー？」

封筒をひっくり返すと、丸っこい字で水野葵と書かれていた。緊張していたのか、少しだけ字が震えている。俺はほほ笑んだ。我が妹ながら、微笑ましいとか思ってしまう。

俺は手紙の中身が透けて見えないかと封筒を見つめながら、葵に言った。

「じゃ、今日はこれを渡しに行こうか。葵も来るだろ？」

『……』

予想外の沈黙。俺は封筒から目を離して、葵の方を見た。葵は俯いたまま、肩を揺らしている。

「おい。お前、来ないの？」
『だ、だって恥ずかしいし……』
葵は肩を揺らしながら、ぼそぼそと言う。いつもの元気はどこに行った。
「……そりゃあ別に、俺一人で渡しに行ってもいいけど。それはそれで、相手の反応とかが気になるんじゃないのか？」
『うっ』
図星らしい。俺はにやりと笑った。
「別にいいけどね？　俺一人でもさー」
同じことをもう一度言うと、葵は顔をあげ、それから勢いよく右手を挙げた。
『行く！　あたしも一緒に行く！！』
「よし」
俺は頷くと、くしゃくしゃにならないよう慎重に、葵の手紙を鞄の中に入れた。

「……で、どれが岡田だって？」
『だからあそこにいる人だって！　ほらーあのー、左、左！！』
ホームランを予感させる、カキーンという爽快な音がグラウンドに響いた。

葵の好きな相手、岡田という野郎は、野球部に所属しているらしい。夏休みなのに、毎日真面目に部活に出ているそうだ。
ということで葵の通っていた中学校、でもって俺の出身校のグラウンドに来たわけだが、
『ほら！　あそこのかっこいい人だってばあ！』
葵の説明が下手すぎて、どれが岡田という野郎なのかが分からない。ちなみに今は練習試合の最中らしく、先ほどホームランを打っ

た選手が、ホームベースに向けて力を抜いて走っていた。
「どこを守ってる人とか、そういう言い方はできないのか？」
『外野とか？　そーいうの、あたしは知らないもん！　覚えようとしたけど、覚えられなかったもん！』
自慢気に言うな。
「あんまり近づくわけにもいかないしなあ……」
観客席もないので、俺は野球部の練習場所からは少し離れた木陰の中に立っていた。人物の顔がなんとか分かるくらいの位置だ。
とにかく暑いし、一刻も早く岡田という野郎を探したいのだが、
『ほら！　今、汗を拭いた人だってば！！』
妹の説明が下手すぎて分からん。

やっとのことで岡田という野郎を確認できたのは、
『あ、今から打つ人だよ！！』
葵のこの、分かりやすい一言のおかげだった。ああよかった、岡田の打つ番が回ってきて。
俺は、バッターボックスにいる選手を上から下までじろじろと見た。まあ、身長も体型も平均くらいか。顔は……
『お兄ちゃん、目つきが怖いよ』
「うるさいな」
岡田の顔は、目が少し切れ長で、鼻が少し大きくて、……正直あまり特徴のない顔だが、なんていうか、
『わー！　打った打った！！　がんばれ走れ岡田君！！』
「なあ。あいつちょっと、俺に似てない？」
『はあ！？』
葵、目つきが怖いよ。
岡田のゴロはあっさりと処理され、バッターアウトを宣告する声がこちらにまで聞こえてきた。それを聞いた葵が、恐ろしい剣幕で怒鳴る。

『お兄ちゃんが変なこと言うから、岡田君がアウトになっちゃったじゃん！』
「俺のせいかよ！」
俺たちがギャーギャー言い争っている間に、試合は終わった。
３－０で、岡田のいたチームの負けだった。
『お兄ちゃんが変なこと言うから、岡田君負けちゃったじゃん！』
「だからそれは、俺のせいかよ！」
俺の怒鳴り声と同時に、頭上で鳴いていたセミが慌てたように飛んでいった。

選手たちが、続々とグラウンドを出ていく。
今日の練習が終わったことを確認して、俺は木陰から一歩外に踏み出した。暑い。
後ろから葵が、おどおどしながらついてくる。
『お、お兄ちゃん、本当に行くの？』
「なんだ今更。はっはーん。フラれるのが怖いんだな？」
『……』
図星か。俺は鞄の中に手紙が入っているかどうか確認しながら、
「別に渡したくなけりゃ、それでもいいけど。俺があとで朗読するだけだし」
『渡す！　渡す！！』
「分かったから、あんまり大声出すな。耳が痛い」
俺と葵は、岡田に少しずつ近づいていく。それに気付いた岡田が首を傾げた。その顔を見ながら俺は考える。やっぱり、
「俺に似てないか？」
『お兄ちゃんうるさい！』
葵に怒鳴られ、俺は黙って岡田のもとへと向かった。

19　マジかよ

いざ岡田の近くまで来ると、葵は俺の後ろに隠れてしまった。俺は背中に張り付いている葵の方を見る。恥ずかしいらしく、顔が紅潮していた。林檎みたいだな、と苦笑する。

「おい、葵。岡田には、お前の姿は見えてないんだぞ」

『知ってるもん。いいから、早く渡してよ！』

葵にせっつかれ、俺は岡田に近づく。大きな水筒を鞄の中にしまっていた岡田は、俺の方を見て怪訝な顔をした。そりゃそうだ。

俺は、岡田の友達でも野球部のＯＢでもなんでもないんだから。

「えーっと。お前……君が岡田君？」

『お兄ちゃん今、お前って言ったでしょ！　お前って言ったでしょ！　ねえ！！』

葵の叫び声は無視して、俺は岡田という野郎に渾身の笑顔をプレゼントする。岡田は汗を拭きながら、「そうですけど……」と警戒した声で答えてきた。

「はじめまして。俺は、水野夏樹っていいます。水野葵、覚えてるかな？」

「あ……」

覚えていたらしい。岡田はさっと目を伏せて、それから気まずそうに、鞄の中の物をいじりはじめた。恐らく、葵のことは自殺だと思っているのだろう。まあ、そこら辺は今はどうでもいい。

俺は自分の鞄から、ピンク色の封筒を取り出した。そしてそれを、岡田の方に差し出す。

「これ、死んだ妹の机から出てきたんだ。どうも、君宛てみたいだったから」

岡田はその封筒を一目見て、また目を伏せた。

「……受け取るだけ、受け取ってもらえないか？」

俺の言葉を聞いて、岡田が顔を上げる。それから遠慮がちに、手

紙の方に手を伸ばしてきた。その手が、思いっきり震えている。
「あの、俺……」
「ん？」
手紙を手に取り、岡田は目を閉じる。
「俺、水野のこと、好きでした」
「――ちょ、マジかよ……」
我ながら気持ち悪い反応である。しかし岡田はそんな俺の反応は気にしていないらしく、頷いた。汗なのか涙なのか分からないものが、零れおちる。
「だから水野が死んだって聞いて、本当にびっくりして……」
岡田の肩ががたがたと震えだす。なんてフォローしてやればいいのか分からない。葵の方を見ると、葵は葵で泣きじゃくっていた。俺も泣きたい。どうすればいいんだこの状況。
「……あのー。野球頑張れよ、岡田君」
頭をぼりぼり掻きながら俺が言うと、岡田は頷いた。それから、
「ありがとうございます」
俺の後ろの方を見ながら言った。ように見えた。
「……え？」
俺は後ろを振り返る。後ろにいるのは、泣きじゃくってる葵だけだ。
「え？」
視線を戻すと、岡田は手紙を握りしめたままボロボロと泣いていた。
――偶然、か？
両想いの岡田と葵の間に挟まれ、泣きたい気分のまま、俺は夏のグラウンドに立ち尽くしていた。

『あたし、岡田君と両想いだったよおー』
帰り道、わんわん泣きながら葵がそう言った。幼稚園児かお前は。
そういえば一時期、葵がナイターを見ながらバットを振る真似をしているときがあった。いつもはナイターなんて見ないし、その前に葵はスポーツが好きでもない。何してるんだ？　と聞いたら、「野球ってそんなに楽しいのかなーと思って。体験中！」と笑いながら答えた。
あの時のあれはきっと、岡田の気持ちに少しでも近づきたくてやってたんだろうな。
「……」
両想いでよかったな、とは言えなかった。

だって葵はもう、好きな奴と手を繋ぐこともできないんだ。

20　一泊二日

葵が死んでから2週間が経った。葵を突き落とした犯人の手掛かりも掴めないまま。

家の空気は相変わらずで、食事の時以外は会話がほとんどない。食事の時だって、喋っているのは俺と母だけで、父は無言。葵がいたころは気にならなかったが、父はこんなにも無口な人だっただろうか。

水曜日、晩飯を食べ終わる頃に、母が俺と父に声をかけた。

「これ、覚えてる？」

母が机の上に置いたのは、温泉旅行のチケットだった。

『あ、これ！！　あたしが当てた温泉旅行！』

葵が叫ぶのを聞いて、俺も思い出した。

1か月前、ショッピングモールのくじ引きで、葵が温泉旅行のチケットを当てたのだ。ちょうど家族4人分で、葵はかなりはしゃいでいた。

葵に誘われた時、暑いのに温泉旅行かよ、と思った覚えがある。父は、「仕事もあるし、行けるかどうかは分からない」と答えていた。

しかし葵は、家族みんなで温泉旅行に行くんだと張り切っていた。行く前に、死んでしまったけれど。

「葵が楽しみにしてた、一泊二日の温泉旅行。私がチケットを預かってたのを思い出して……。確認したら、期限が今週中なの。夏樹はちょうど夏休みだし、土日なら、お父さんも一緒に行けないかし

ら」
父は黙っている。俺の横に座っている葵は『行きたい行きたい！』と叫んでいるが、母には聞こえていない。母は、父の顔を見ながら言った。
「……葵、この旅行とても楽しみにしてたから。こんなときに不謹慎かもしれないけれど、せっかくだから皆で行かない？　そうした方が、葵も喜ぶと思うの」
父はやはり無言のまま、チケットを1枚手に取った。それから、チケットの裏に書かれている地図を見て、
「車で移動できる範囲だな」
「お父さん、車で連れて行ってくれる？」
「ああ」
意外だった。家族で旅行に行くなんて、何年ぶりだろう。
母はほっとした顔で、俺の方を見た。
「夏樹は？」
「もちろん行くよ」
俺はそう言ってから、葵の方を見た。葵は嬉しそうに、何度も頷きながら笑っていた。

「葵。旅行の日、俺の身体を使えよ。1日、貸してやる」
自分のベッドに横たわりながらそう言うと、ベッドの端に腰かけていた葵は目を丸くして、それからブンブンと首を振った。
『いいよそんなの。あたし、見てるだけでいい』
「だけどお前、温泉入りたくねえの？　その身体だと、入れないだろ」
『うっ……』
やっぱり入りたいんだな。俺は仰向けに寝転がって、笑う。
「俺はもともと、その旅行は乗り気じゃなかったんだよ。せっかくだし、お前が行って来い。お前が当てたチケットだろ？」

『……いいの？』
控えめな、葵の声。俺は天井を見上げたまま、笑った。
「いいって言ってるだろ。そのかわり、俺の分まで楽しんでこいよ」
『ありがとうお兄ちゃん！　それじゃ、お兄ちゃんの身体、一泊二日で借りるね！』

どこのレンタルショップだ俺は。

21　行ってらっしゃい

旅行当日。葵は張り切っていた。
『お兄ちゃん早く！！　出発時刻になっちゃうよ！』
俺は携帯で時刻を確認して、笑う。
「まだ大丈夫だよ」
『もう！　この部屋、時計がないから時間が分かりにくいよ』
「お前の部屋の、文字盤が見えにくいハート形の時計もどうかと思うが」
俺が指摘すると、葵はふくれっ面をした。
『あれは友達からもらったものなの！　……確かに私も、あの時計は不便だから新しいのがほしいなーとは思ってたけど』
ぶつぶつ反論しながら、葵は俺の方をちらりと見た。
『お兄ちゃん、ちゃんと着替え入れた？』
俺は鞄の中身を確認しながら答える。
「ああ、入れてる」
『財布も？』
「あるよ。あんまり無駄使いするなよ？」
俺は財布の中身を確認しながら釘をさす。すると、葵は笑った。
『お金は、あたしのを使うから大丈夫だよ。こう見えてあたし、結構貯金してたんだから。お年玉とか』
「え？」
『だから、財布だけ貸して』
葵はうきうきとした笑顔で笑う。俺は頭を掻きながら、言うべきことを忘れないうちに言っておく。
「……一応携帯は持って行くけど、電話がかかってきてもメールが来ても無視しろ。なんかあった時は、俺の身体から一度抜けてくれ。とにかく、温泉旅行以外は何もしなくていい。分かったな？」
『うん！』

葵は嬉しそうにうなずいた。俺もつられて、笑う。
「服装だけど、お前はこんなのでいいのか？」
俺は自分の服装を見下ろす。青色の半袖パーカーに、黄土色のダボダボズボンという超ラフな格好。……まあ、おしゃれな服なんて俺は持ってないんだけど。
『うん、それでいいよ。動きやすい服の方がいい』
「……なら、いいけど」
俺は鞄のチャックをしめた。多分、入れ忘れたものはないだろう。

「じゃ、気をつけて行ってこいよ」
『お兄ちゃんも行くんだけどね』
「変な感じだな」
葵は笑った。それからゆっくりと、こちらに近づく。
『じゃ、お兄ちゃんの身体、借りるね』
「ああ、行ってらっしゃい」

そこで、俺の意識は途切れた。

目を開けると、お兄ちゃんの部屋が見えた。あたしは自分の手を見る。あたしよりも大きくて、ごつごつした手。あたしのじゃなくて、お兄ちゃんの手だ。
「憑依成功」
誰にでもなく、呟く。あたしはお兄ちゃんが用意していた荷物を持って、部屋を出た。自分の部屋に寄って、お兄ちゃんのボロボロの財布に自分のお金を入れる。

これからあたしは、「水野夏樹」として過ごさなきゃ。

外に出ると、お父さんが既に車のエンジンを入れて、車内に空調を効かせていた。排気ガスの独特のにおい。助手席に座っていた母が、あたしの方を見て笑う。それから窓を開けて、顔だけひょこっと出した。
「夏樹、遅かったじゃない」
お母さんの笑顔を見て、あたしも笑った。
「ちょっと準備に手間取ったんだ」
お兄ちゃんの口調を真似てみる。我ながら、結構似てると思う。
「家の鍵、閉めといてね」
「ああ」
鍵が閉まっていることを確認して、車に乗り込む。助手席の後ろに座ると、お母さんが不思議そうな顔をした。
「夏樹、どうしたの？　いつもはそこに座らないでしょ」
そう言われてぎょっとする。そうだった。いつも車に座るときは、助手席にお母さん、運転席の後ろにお兄ちゃん、助手席の後ろに私が座ると決まっていた。いつもの癖で、お母さんの後ろに座ってしまった。お兄ちゃんなら、ここには座らないはずだ。
「……ちょっと気分を変えてみようかと思って」
あたしが苦笑すると、納得したのかしないのか、お母さんは前を向いてしまった。それまで無言だったお父さんが、不意に口を開く。
「じゃ、出発するぞ」
「うん！」
「どうしたの夏樹、そんな張り切って」
「あ。いや、なんでもない」
こうして、3人の乗った車は無事に家を出発した。

22　一緒に入ろうな！

高速道路のパーキングエリアに着くと、あたしはそこら辺にあったベンチに座って、お兄ちゃんの身体から抜け出した。お兄ちゃんの隣に座って、意識が戻るのを待つ。しばらくすると、お兄ちゃんが目を開けた。

「……え？」

目を覚ましたお兄ちゃんが、あたりをきょろきょろ見渡している。その様子がおかしくて、あたしは笑った。

「え？」

隣にいるあたしに気付いたお兄ちゃんが、首をかしげる。あたしが身体から抜け出るくらいの緊急事態が発生したと思ったらしい。慌てた様子で、

「あ、葵。なんかあったのか？」

そう言ってくるお兄ちゃんに、あたしは真顔で答えた。

『お兄ちゃん、トイレ行ってきて！』

「はあ！？」

お兄ちゃんは大きな声を出してから、口に手を当ててあたりを見渡した。

『誰にも見られてないよ』

笑いながらあたしが言うと、お兄ちゃんは大きなため息をついた。

「自分で行って来いよ、トイレくらい」

『やだ！』

納得いかない顔のお兄ちゃんに、あたしはきっぱりと本音を言う。

『だって男子用トイレに入りたくないし、お兄ちゃんの、……見たくないし、触りたくないし』

それを聞いたお兄ちゃんが、半分呆れた顔で笑った。

「んなこと言って、温泉はどうするつもりだ？」

『それとこれとは別問題なの！　早く行ってきて！　ちゃんと手、

洗ってきてね！』
お兄ちゃんはもう一度ため息をつくと立ち上がり、フラフラとトイレに向かっていった。
よかった。実は結構我慢してたんだよね、トイレ。

お兄ちゃんがトイレから帰ってくると、あたしは素早くお兄ちゃんに憑依して、お父さんの車に戻った。
「夏樹、遅かったわね。酔ったの？」
お母さんが心配そうな顔で、ルームミラー越しにあたしの顔を見てくる。
「いや。ちょっと迷子になっただけだよ」
「こんな小さなパーキングで迷子？」
「……ま、そんな時もあるんだよ」
車は順調に、高速道路を飛ばす。

目的地まで、もうすぐだ。

古臭くてボロボロの旅館なんじゃないかと予想していたけれど、思った以上に立派な旅館だった。ていうか、ホテルだった。温泉設備の整った、ホテル。
「旅館かと思ってた」
あたしが言うと、お母さんが笑った。
「でも、温泉はとても立派よ」
お母さんが持っていたパンフレットを見ると、大浴場を始め、露天風呂とかジャングル風呂とか、とにかく色んな種類の温泉があった。あたしのテンションが一気に上がる。
「うわあ！　一緒に露天風呂入ろうね！　お母さん！」

「え？」
「へ？　……あ」
そうだった。今はお兄ちゃんの中に入ってるんだった。
「や、やだなあ。冗談に決まってるじゃん。ははは……」
あたしはそそくさと、お父さんの横に並ぶ。
「一緒に入ろうな！　父さん！」
「……ああ」
う、うわあ……。お父さんと一緒にお風呂に入るの、何年振りだろう。正直泣きそうなんだけど。

ホテルの人に案内された部屋は、思ったよりも大きかった。というか、いつもより一人少ないから、広く感じるんだ。
いないのは、足りないのは、あたしなんだけど。
お父さんは部屋に入るなりテレビのリモコンを握りしめ、ニュース番組をチェックしだした。
「いい景色ねー」
ベランダからお母さんの声が聞こえたので、あたしはベランダに向かった。海辺にあるホテル、しかも海に面したベランダだったおかげで、夕日が沈んでいくのがとてもよく見えた。砂浜に、ビーチバレー用のネットが設置されている。
あたしはいつもよりもテンションを低めにして、お兄ちゃんのふりをしながら言った。
「ホントだ。結構綺麗な海だな」
「……葵もこの景色を見たら、喜んだだろうなぁ……」
ぽつりと、お母さん。

あたし、ここにいるよ？　この景色、見えてるよ。

でもそれは言えなくて、あたしは口を固く結んだまま、沈んでいく夕日を眺めていた。

23　何言ってんの？

お父さんが浴衣の準備をしだしたのを見て、あたしは慌てた。
「おと……父さん、温泉に行くの？」
「ああ」
お父さんは無表情で、浴衣のサイズをチェックしている。
「夏樹も行ってきなさいよ。私ももうすぐ行くし」
お母さんは洗顔用具の入ったポーチを準備しながら、あたしに向かって笑顔で言う。
「あ、ああ……」
そうは言ったものの、心の準備ができてない。

お父さんとお風呂。
お父さんとお風呂。
お父さんと
「夏樹、行くぞ？」
「は、はい！！」
あたしは男性用の浴衣をひっつかみ、慌てて外に出ようとして、
「お前、替えの下着は？」
「……あ」
下着を取りに戻った。

温泉は、とにかく立派だった。大浴場はプールみたいな広さだし、五右衛門風呂や打たせ湯もあった。テーマパークみたいだと思った。けれど。
おじさんたち、前を隠してほしい。切実に、前を隠してほしい。

前というか下というかなんというか。

「夏樹、お前はどうして胸まで隠してるんだ？」
お父さんに言われて気付く。あたしは右腕で、必死に胸を隠していた。お兄ちゃんは男だから、胸まで隠す必要はないわけで、でもあたしとしては抵抗があるんだけど……。
「いや、気にしないでよ。あはは」
お父さんは一応、タオルで下を隠している。それを見て少しだけほっとした。

あたしはお父さんの後にくっついて、そそくさと歩いた。とりあえず、こんな恐ろしい無法地帯で一人ぼっちにはなりたくない。
お父さんが五右衛門風呂に入ったので、あたしもそれに続いた。
ここのお湯、いい感じにぬるい。
「……母さんは」
お父さんが、細長い滝のような打たせ湯を見ながら、呟く。
「今頃一人で風呂に入ってるんだろうなあ……」
その独り言が何を意味するのか。あたしはちゃんと、理解できているんだろうか。
「……葵さ、もしかしたら一緒に来てるかもよ。ほら、温泉旅行楽しみにしてたし。今頃、俺たちの横で笑ってるかもね」
あたしが言うと、お父さんが珍しく笑った。それから言った。
「来てたとしても、男湯（ここ）にはいないだろう」
いや、それがいるんですよ。男湯（ここ）に。

いつも無口なお父さんは、この時はなんでかとてもよく喋った。
あたしは、お喋りなお父さんを初めて見た。いつもは無口で、無表情で、……あたしが死んでからは、それがより一層酷くなってた

ような気がした。
温泉パワーかな、と内心で笑った。その時だった。
「葵のことは、俺が悪かったのかもしれん」
え？
「……何言ってるの？」
あたしが眉をひそめると、お父さんは両手でお湯を掬(すく)って、バシャバシャと顔を洗った。それから
「やっぱり自分が男だから、思春期の女の子とは接しにくくてな。……俺には異性の兄弟がいなかったから、余計に。どう接してやればいいのか、分からなかったんだ」
お父さんはもう一度顔を洗った。洗ったというか、きっと、『隠した』。
「葵の話を、もっとちゃんと聞いてやればよかった。……女のことは母さんに任せた方がいいだろうって、距離を置いてたんだ。母さんにすべてを押しつけてたのかもしれない」
「……」
「そうじゃなくて、俺もちゃんと話を聞いてやったりしておけばよかったなって。母さんが非力だったんじゃない。俺が、非協力的だった。もっと協力的だったら、そうすれば、もしかしたら葵は」
「何言ってんの？」
そう言い放ってから、あたしも顔を洗う。涙を隠すために。
「葵は自殺じゃないんだよ。あれは……事故だった。父さんのせいでも母さんのせいでもない」
あたしの言葉を聞いて、お父さんは怪訝な顔をした。
「お前は前にもそう言っていたな。自殺じゃない、と。なぜだ？遺書がなかったからか？　それじゃ、屋上にきちんと揃えられていた葵の靴はなんだっていうんだ」
あたしは黙り込んだ。そこら辺の記憶がいまだに曖昧で、きちんとした答えを返せない。

あたしはどうしてあの時、屋上で靴を脱いだんだろうか。

24　喜ぶかしら？

天ぷら。おつくり。高級そうなお肉。釜めし。茶碗蒸し。それからフルーツ。

「おいしいわね。天ぷらはサクサクだし、お肉も臭くないし」

お母さんの言うとおり、このホテルの料理はおいしかった。お兄ちゃんにも食べさせてあげたいなあと思ったけれど、ここは遠慮なくあたしが食べる。1泊二日借りるねって言ったし。旅行のチケットを当てたのはあたしだし。

温泉では饒舌だったお父さんは、食堂に来てからはずっと無言だった。おいしいとも何も言わず、もくもくと料理を食べて、食べ終わったら自分一人で部屋に帰ってしまった。

「ナイターでも見る気なんでしょう」

お父さんの後姿を見ながら、お母さんは苦笑した。

休日はいつもそうだけど、お父さんはテレビのリモコンを握りしめてしまう。それは旅行に来ても変わらないみたいだ。

お父さんが温泉で話していたことを思い出す。何も考えていないようで、すごく考えてる人。ただ、少しだけ不器用な、人。

「私たちはゆっくり食べましょうか」

お母さんが茶碗蒸しを食べながら、笑う。あたしもつられて笑った。なんだかんだで、お兄ちゃん以外の人と話すのは2週間ぶりなのだ。話したいことは色々あるけど、下手なことを話したら、お母さんたちを余計に傷つけてしまうだけなんだろうか。

ご飯を食べ終わったあたしとお母さんは、1階にある売店を見に行った。部屋に帰ってもやることがないし、お父さんは間違いなくナイターを見てるんだろうし、あたしもお母さんも野球には興味ないし。

「夏樹は野球、見なくていいの？」
……そう言えばお兄ちゃんは、お父さんと一緒に野球見てたっけ。
「いや、いいんだよ。今日は旅行を楽しみたいからな」
「ふーん」
我ながら、なかなかお兄ちゃんにそっくりだと思う。なんか、屁理屈っぽい所が。

ピンク色の服を着た猫ちゃんのマスコット。名前の入ったキーホルダー。女の子用のお土産を見ていたら、お母さんがこっちに寄ってきた。
「夏樹、何見てるの？」
「美鈴に土産を買っていこうかと思って」
これは本当で、あたしは美鈴ちゃんにお土産を買って帰ろうと思っていた。普段お兄ちゃんがお世話になってるし、生前は自分もお世話になってたし。……変な言い方だけど。
「夏樹は今でも、美鈴ちゃんと仲がいいのね。子供のころからずっと一緒だもんねえ」
ニヤニヤしながら、お母さんが言う。ああ、こういうところが、あたしはお母さんに似てるんだ。
お母さんはニヤニヤした笑顔のまま、続けた。
「女の子が喜びそうなお土産、選べるの？　お母さんも一緒に探してあげましょうか」
「いいよ。自分で探すから」
あたしだって、女の子ですから。
「そう。……あ、これもかわいいわね」
ご当地キャラクターが温泉に入っているキーホルダーを見て、お母さんが笑う。そのお母さんの手元から、チリン、と鈴の音がかすかに聞こえた。
あたしはお母さんの手元を見る。お母さんは、かわいらしい女の

子用のキーホルダーを手に持っていた。さっきまであたしが見ていた、ピンク色の服を着てる猫のキーホルダーだ。
「母さん、それは自分用？」
お母さんにしては子供っぽいものを選ぶなあと思ったら、お母さんは首を振った。それから猫のマスコットに目をやって
「……葵に」
半分しか笑ってない顔で、そう言った。
「あの子、こういうキャラクター好きだったから。喜ぶかなーっと思って」
あたしはもう一度、お母さんの持っているキーホルダーを見る。それは間違いなく、さっき一目見てかわいいな、と思ったやつだ。けれど美鈴ちゃんの趣味ではないと思って、買うのを辞めたキーホルダー。
視界がぼやけて、あたしはあわてて上を向いた。商品棚の上には、地名の書かれたカラフルな提灯が吊られている。
「ね。葵、これ喜ぶかしら？」
お母さんの不安そうな声を聞いて、あたしは笑う。上を向いたまま。
「……喜ぶよ。絶対、喜ぶ」
声が震えてるのがばれないように、小さな声で付け足した。
「ありがと」

25　証明するから

「葵はさ、自殺じゃないし、死んだのは誰のせいでもないよ」
売店の横にあった小さなゲームコーナーの中を歩きながら、あたしは言った。薄暗い照明の中に、古めかしいＵＦＯキャッチャーやエアホッケーがちょろちょろとあるくらいで、『温泉に力を入れてる分、ここは手を抜いてます』と言わんばかりの情景だった。そのせいか、あたしたち以外のお客さんはいなかった。
「葵は母さんたちにすごく感謝してたし、怨んでなんかないし、そもそもあれは自殺じゃないんだよ」
あたしはＵＦＯキャッチャーの中にある、あまりかわいくないクマのぬいぐるみを見ながら言った。
「母さんが一人でその責任を背負う必要もないんだよ。……みたいなことを、風呂に入ってるときに父さんも言ってた」
あたしが振り向くと、後ろからついてきていたお母さんは、目に涙を浮かべていた。

もどかしい。お兄ちゃんの姿じゃなくて、あたしの姿でちゃんと言えたら、もっと説得力があるのに。

「……葵が、自殺するような奴に見えるか？」
「だからよ」
お母さんが、久しぶりに声を出した。
「そう見えなかったからこそ、逆に何かを抱え込んでたんじゃないかって。言えなかったんじゃないかって。いつも笑ってたけど、本当は」
「そんなことないって言ってるじゃん！！」
思わず声を荒げた。そのうえ、「じゃん」とか言ってしまった。お兄ちゃんなら、絶対に言わないのに。

「夏樹……？」
「――とにかく」
あたしはおもむろに財布から１００円玉を取り出して、ＵＦＯキャッチャーに突っ込んだ。
「葵が自殺じゃないって、俺が証明するから」
ＵＦＯキャッチャーから間抜けな電子音が流れ出す。あたしは欲しくもなんともなかったクマのぬいぐるみに向けて、アームを動かした。

アームは、クマのぬいぐるみにかすることもなく、なにもない空間を掴んだ。

部屋に戻ると、お父さんはすでに寝ていた。現在２２時過ぎ。ナイターは見終わったらしい。
「丸一日、車の運転をしていたからお父さんも疲れたのね」
お母さんは笑いながら、あたしのために買ったキーホルダーを自分のバッグの中に入れた。紙袋の中から、鈴の音がかすかにした。

その日の夜、あたしはお兄ちゃんの身体を使って、久しぶりに眠った。

そして、夢を見た。

場所は、あたしが落ちたあの屋上だった。暑い日差しの中、誰かの影がぼんやりと見える。
「暑くない？」

……これはあたしのセリフだっただろうか。あたしは笑いながらスニーカーを脱いで、綺麗に並べた。

誰かの靴の、隣に。

靴下を履いているとはいえ、真夏のアスファルトの上はかなり熱かった。

「あっつ！！　やっぱりここ、暑いねー」

あたしはそう言いながら、人影に近づいた。

低い柵に腰かけている人物は、あたしの方を見てうっすらと笑った。

まるで困ってるような、泣き出しそうな、顔で。

26　写真

目が覚めると、見慣れない天井が見えた。あたしの部屋じゃないと考えてから、ホテルなのだと気が付く。あたしはすかさずお兄ちゃんの身体から抜け出て、お母さんの眠っているベッドの端に腰掛けた。

お兄ちゃんは目覚めると、顔を左横に向けて、あたしとお母さんの姿を確認した。それから上半身を起こし、部屋を見渡した。

お父さん、お兄ちゃん、お母さんの順番でベッドに寝ているのに気付き、額に手を当てる。

「川の字かよ……」

ぼそっと呟くお兄ちゃんに、あたしはとびきりの笑顔で笑った。

『おはようお兄ちゃん！』

「お前……なんで俺の身体から出てきた？　今日一日、憑依してていいんだぞ」

首を引っ掻きながら面倒くさそうに言うお兄ちゃんに向かって、あたしは腰に手を当ててふんぞり返った。

『あたしがくじ引きで当てたこのホテルの素晴らしい温泉を、お兄ちゃんにも堪能してもらおうと思ってね！　朝の４時からやってるらしいから、朝風呂に行ってきなよお兄ちゃん！　お勧めは、五右衛門風呂だよ！』

「……俺に気を遣ってんのか？別に俺は」

『で、お風呂に行くついでにトイレも済ませてきてくれる？　ちゃんと手、洗ってね！』

口を開いたまま、お兄ちゃんは固まった。

もちろん、お兄ちゃんにお風呂を楽しんできてもらいたいという気持ちもある。けれどその前に、トイレに行ってほしかった。

どうしても、どうしてもお兄ちゃんの身体でトイレに行くのには抵抗があった。

しぶしぶお風呂に出かけたお兄ちゃんは、1時間ほどで帰ってきた。それから
「いい風呂だったな。特にあの五右衛門風呂の、」
お兄ちゃんがうんちくを語りだす前に、あたしはさっさと憑依した。

お味噌汁に、ベーコンエッグ、サバの塩焼き、ヒジキ、味付けのり、納豆。
「ホテルの朝食って、朝食ー！　って感じがするよな」
あたしが笑うと、お母さんも笑った。お父さんは無言で、納豆に箸を入れてグルグルとかき混ぜている。
「父さん、なにか話す話題はないの？」
わざとお父さんに話を振ると、お父さんは目を見開いて固まった。それからさっきの倍のスピードで箸を動かしながら、
「……特にないな」
ぼそっと、そう言った。あたしとお母さんは顔を見合わせて、笑う。

昨日、分かったことがある。
お父さんは、本当に不器用だってっこと。

帰る前に海辺をドライブしようということになった。あたしは窓の外を見る。キラキラ光る水面がとても奇麗で、その様子が、夏を物語っていた。
記念に、砂浜で写真でも撮ろうか。そう言いだしたのは、お父さんだった。

「珍しいこと言うのね」
お母さんが言うと、
「家族旅行も久しぶりだし、……せっかくだからな」
すこしだけ口角を持ち上げて、お父さんは笑った。

気が付くと、俺は砂浜の上に立っていた。夏樹、はやくー！　と叫ぶ母の声が聞こえている。
「あ？」
『お兄ちゃん、集合写真を取ることになったんだよ！』
「は？　じゃ、撮ってこいよ」
『憑依してたら、あたしは写らないかもしんないじゃん！　幽霊モードなら、もしかしたら写るかなあって』
もしもお前が写真に写ったら間違いなく心霊写真だろそれ。ていうか、なんだよ幽霊モードって。
俺の内心の突っ込みは届いていないらしく、葵は髪の毛を手櫛で整えている。俺はため息をついて、両親のもとに向かった。母が、犬の散歩をしていたおじさんに使い捨てカメラを渡している。機械音痴な母は、いまだにデジカメを使えないのだ。
「じゃ、並んでくださーい」
そう言われて、母、父、俺の順で横一列に並んだ。
はい、チーズの合図とともに、フラッシュがたかれた。
俺の横にいた葵は、ちゃんと写ったのだろうか。

27　かわいいでしょ！？

帰宅するなり俺の身体から離れた葵は叫んだ。
『楽しかったー！！』
「そりゃよかったな」
俺は自分の部屋に入ると、汚れた衣類を取り出すために鞄を開けた。
「ん？」
ホテルの名前入りのビニール袋が、鞄の中に入っていた。更にそのビニールの袋の中に、小さな紙袋が入っている。土産、か？　俺がその袋を取り出すのを見て、葵がこちらに近づいてきた。
『それ！　ピンク色のは、美鈴ちゃんにあげるやつだから！』
「美鈴に？」
俺はピンク色の紙袋を見ながら、苦笑した。それから、岡田には買ってこなかったのかと訊こうとして、やめた。
買ったところで、渡せないんだ。葵は。
『お兄ちゃんが美鈴ちゃんに渡してね！　お兄ちゃんが選んだお土産ってことになってるんだから』
「はいはい」
俺はビニール袋に美鈴への土産をしまおうとして、もうひとつ、青色の紙袋が入っていることに気が付いた。
『あ、それ。お兄ちゃんにあげる』
さっきよりもテンションの低い声で、葵が言う。
「え、俺に？」
葵は無言で頷いて、ベッドの端に腰掛けた。
『身体貸してもらったから。お礼っていうか……』
言いにくそうにもじもじする葵を見て、俺は笑った。
「今、開けていいか？」
『え、うん』

俺は青色の袋を、慎重に開けた。そして、固まった。

袋の中から出てきたのは、青色の車のおもちゃだった。ボンネットにホテルの名前が、屋根には白い文字で「なつきくん」と書かれている。

「葵、お前……」

『かわいいでしょ！？　なつきくんって書いてるのは、それで終わりだったんだよ！　その車ね、後ろに引いたら前進するんだよ。かわいいでしょー』

お前、俺、もう高1なのに……。

「……まあ、大切にするよ。ありがとな」

俺がそう言うと、葵はにかっと笑った。それから小さな声で

『こちらこそ、ありがとう』

と、呟いた。

「明日にでも、美鈴にこれを渡そうか」

ピンク色の袋を見ながら俺が言うと、葵は嬉しそうに頷いた。ちょうどその時、

「夏樹、御飯よー」

リビングから、母の声が聞こえてきた。

「そういや、夕飯は何なんだ？」

俺が尋ねると、葵はにやりと笑った。

「今日はお母さんも疲れただろうって、お父さんがスーパーでお惣菜を買ってくれたの。お兄ちゃんのは、チンジャオロースと、ピーマンの肉詰めにしておいた」

「……お前というやつは……！！」

その日の夕飯は、俺に憑依した葵がおいしく頂いた。

28　犯人は現場に

美鈴に「渡したいものがあるから近いうちに会えないか」とメールをしてみたものの、返信がなかった。いつもなら、その日のうちに必ず返ってくるのに。

メールを送ってから2日経っても、返事はこない。俺は何度も受信ボックスを確認して、その度にため息をついた。

『お兄ちゃん、嫌われちゃったんじゃないのー？』

俺のベッドの上でニヤニヤしながら、葵が言う。

「……この前会った時、喧嘩でもしたっけ？」

美鈴と最後に会ったのは、映画を観にいった時だ。思い出してみるが、特に言い争った覚えはない。ただ少し、気まずかったくらいで。

美鈴の家がどこにあるのかは知っている。けれどメールの返事もないのに、押しかけるように行くのはどうなんだろう。

「葵。一応聞いておくけど、土産って食べ物じゃないよな？」

『違うよ。キーホルダー』

だったら焦る必要もないか。俺はもう一度ため息をついて、立ち上がった。もしもばったり会った時に渡せるよう、鞄の中に美鈴への土産を入れておく。

『お兄ちゃん、どっか行くの？　もう夕方だよ』

「駅前の本屋に行くだけだ。夕方に動いた方が、まだ涼しいかと思って」

『あ、あたしも行く！』

葵がベッドから跳び起きるのを見て、俺は首をかしげた。

「なんだ？　なんか欲しい漫画でもあるのか？」

そうだとしたら、かなり嫌なんだが。

だが、葵の返答は俺の予想の斜め上を通り過ぎた。

『ううん。あたしが死んだビル、ちょっと見に行きたいなと思って』

「お前の死んだビル？　……行って、大丈夫なのか？」
一度連れていった時、葵は怖いと言った。それ以来、あのビルには近づかないようにしていたのに。
葵は考え込むように俯いて、けれどもすぐに顔をあげた。
『実はね。死んだ時のこと、ちょっとだけ思い出しかけてるの』
「本当か！？」
思わず大きな声で反応してしまい、俺はあわてて口をふさぐ。幸い、下の階にいる母には聞こえていないようだ。
葵は俺の様子を見て、苦笑した。それから困ったように
『でもね、詳しい部分がどうしても思い出せないんだ。だから、もしかしたら現場に行ったら何か思い出せるかなーって。ほら、よく言うじゃん。犯人は現場に帰ってくるって』
いや、お前は犯人じゃなくて被害者だろうが。

駅前に向かって、線路沿いを歩いていく。線路わきには雑草が元気に伸びていて、その上を小さな虫が飛び交っていた。
夕方とはいえ、昼間の日差しを吸収した空気は生ぬるい。俺はうっすらと汗ばみながら、駅に向かって歩いた。踏切を通り過ぎ、やっと駅の先端が見えてきたころ、
『あ、美鈴ちゃん』
「え？」
葵の指差しているところに目をやると、駅のホームに立っている美鈴の姿が見えた。お気に入りなのか、見たことのある白いワンピースを着ている。
どこかに行くつもりなんだろう。……こんな時間から。
その時だった。

『あああああぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！』

今までにない、葵の絶叫。

どうしたんだと訊く前に、俺の意識は押しつぶされた。

29　思い出したんだ

ホームに立っている美鈴ちゃんの姿を見つけた時、同じことを昔……というか、生きてた頃に経験したような気がした。いつだろう、と思いながら、美鈴ちゃんの足元を見る。

遠目からでも分かる、大人しい色合いの、けれどどことなく可愛いミュール。

装飾品の少ないシンプルなそれは、美鈴ちゃんにとてもよく似合っている。

そう思いながらあたしは、自分のスニーカーを、隣に並べた。

『あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』

思い出したことと、これから起こるであろうことに悲鳴をあげる。お兄ちゃんが驚いてこちらを振り向いた。けれど、説明してる暇がない。あたしはすかさずお兄ちゃんに憑依して、ホームに向かって全力で走った。

思いすごしなら良い。

けれど、そうでなかったら。

いまのあたしは、美鈴ちゃんのことを「知っている」。

あの時知らなかったことも、知ってる。

だけどまた、美鈴ちゃんのところに向かってる。

もう一度、止めるために。

ほらね？　だから言ったじゃん。

嫌いになったりしないって。

意識を取り戻すと、俺はホームの上にいた。何故か肩で息をしている。そして、

ホームに立っていた美鈴の右腕を、掴んでいた。

「……え？」

状況が把握できず、俺は間抜けな声を出す。白線の上に立っている美鈴は、驚いた顔でこちらを見ている。驚いた顔というか、

「夏樹君。……なんで？」

泣きそうな、顔で。

目の前を、特急電車が勢いよく通り過ぎた。

『お、兄ちゃん……』

声がした方を見ると、俺と同じように息を切らせた葵が立っていた。なぜか、悲しそうな表情で。その視線の先には、美鈴。

美鈴は地面にへたりこむと、両手で顔を覆って泣き始めた。

『お兄ちゃん』

訳が分からずオロオロしている俺に、葵が静かな声で言う。相変わらず、美鈴の方を見据えたまま。

『あたし、全部思い出したんだ。あの日のこと』

美鈴の嗚咽が、徐々に大きくなっていく。その様子を見守る葵も、唇を震わせながら泣いていた。悲しそうに、そして、悔しそうに。

葵は深呼吸をして、鼻をすすってから、震える声で言った。

『あたしが死んだあの日、その場にいたのは、ビルの屋上にいたのは……美鈴ちゃんだったんだ』

30　嫌だよ。

あの日、あたしは。

数日前に借りたCDをレンタルショップに返しに行くついでに、駅前のショッピングモールで新しい時計を買おうと思った。壁に掛けてある時計を確認する。友達が誕生日にくれたハート形の壁時計は、可愛いけれどやっぱり文字盤が見にくいなあと苦笑した。

「ちょっと出かけてくるー」
「はいはい、行ってらっしゃい」

お母さんに軽く声をかけて、あたしは外に出た。新しい時計はどんなのを買おうかなあと考えながら、レンタルショップへと歩いた。

ところが、レンタルショップに到着してから、返却するつもりだったCDを忘れてきたことに気付いた。返却するついでに時計を見に行こうと思っていたのに、気付けば時計のことばかり考えていた。我ながら、馬鹿だ。

「……いいや。別に今日が返却日ってわけじゃないし」

自分で自分を納得させて、ショッピングモールへ向かおうとした。その時、視界の端に、白いカーテンみたいなものが映った。

「ん？」

眼を凝らして見ると、ビルの屋上に白いワンピース姿の女の人が立っているのが見えた。

――美鈴ちゃんだ。何故か直感的にそう思った。この距離では顔は確認できないし、白いワンピースを着ている女の子なんていっぱいいる。だけど何故かあたしは、あれが美鈴ちゃんだと確信していた。

そこで何してるの？　と電話したかったけど、あたしは携帯を持

っていない。
白いワンピースの人が、低い鉄柵に腰掛けるのが見えた。危ない。あのまま落ちたらどうするんだろう。
落ちたらどうするんだろうじゃなくて、落ちる気、なの？
あたしはその人がいるビルに向かって走り出した。あの人が美鈴ちゃんかどうかは、もうどうでもよかった。もしも自殺なら、止めなきゃ。それだけを考えていた。

エレベーターを待つのがもどかしくて、階段を駆け上がった。けれど4階のあたりでたちまち後悔する。やっぱりエレベーターを使っておけばよかったと思いながら、あたしは9階のその上に向かって全力で走った。
やっとの思いで屋上にたどりつき、あたしは鉄製の重たいドアを開けた。錆ついていたのか、ギギギ……と音が鳴り、それに気付いたワンピース姿の人が、こちらに振り返った。
それはやっぱり、
「美鈴ちゃん」
やっぱり、美鈴ちゃんだった。
「暑くない？　ここで何してるの？」
あたしは笑いながら、美鈴ちゃんに話しかけた。足元を見ると、

美鈴ちゃんは裸足だった。
「アスファルト、熱いでしょ」
あたしはゆっくりと、美鈴ちゃんに近づいた。あたしが走ったりしたら、美鈴ちゃんはそのまま飛び降りてしまうんじゃないか。そんな気がした。
「……葵ちゃん」
あたしの名前を呼んだ美鈴ちゃんは、今にも泣き出しそうな顔をしていた。それにつられて、あたしまで泣きそうになる。

だめだ。あたしが泣いてどうする。

あたしは美鈴ちゃんの隣で、自分のスニーカーを脱いだ。
「……なんで葵ちゃんも脱ぐの」
苦笑する美鈴ちゃんに、あたしは笑いかける。
「あたし流、人の気持ちを分かりたいときのやり方。その人の真似をしたら、ちょっとでもその人の気持ちに近づけるかなって」
あたしは自分のスニーカーを、美鈴ちゃんのミュールの横に並べた。ついでに、ショルダーバッグも靴の横に放置する。

靴下を履いているとはいえ、やっぱりアスファルトは熱かった。
「あっつ！！　やっぱりここ、暑いねー」
あたしは笑いながら、美鈴ちゃんの隣に腰掛けた。町を見下ろすような格好。このまま上体を前に傾けたら、簡単に落ちてしまうだろう。
「……嫌だよ。美鈴ちゃんが死んじゃったら」
レンタルショップの看板を見ながら、あたしはぽつりと呟いた。

美鈴ちゃんが両手で顔を覆って、あたしは両目で空を仰いだ。

31　本当の

美鈴ちゃんの家が、「少し難しい」ということは、あたしも知ってた。

だけどそれについて美鈴ちゃんから相談されたことはなくて、あたしは美鈴ちゃんの身体の痣を見ながら、いつも心配だけしていた。

本当は訊きたくて仕方がなかったけど、本人が言いたくないものを無理やり言わせたくはなかった。

――だけど、死ぬほど悩んでるなら話は別だよ。と、あたしは言った。美鈴ちゃんはしばらく無言で泣いてから、やがて絞り出すように声を出した。多分、それがその時の美鈴ちゃんにとって、精一杯の声だったんだと思う。

「もう死にたい」

美鈴ちゃんの一言目がそれで、あたしは黙り込んだ。そんなこと言わずに生きようよ！　なんて、軽く言えなかった。美鈴ちゃんは吐き捨てるように、

「私は死んだ方がいいんだよ」

「そんなことない」

二言目には即答した。美鈴ちゃんの眼を見て、もう一度はっきりと言った。

「美鈴ちゃんに死んでほしいなんて、思ってない」

「だけど両親はきっと、そう思ってる。……そう言ってたから」

「……」

答えられなかった。

あたしは、美鈴ちゃんの両親のことを詳しく知らない。――子供に死んでほしいなんて、そんなこと思う親がいるんだろうか。美鈴ちゃんの身体に痣がいっぱいあったのを思い出す。何度も蹴られて、殴られて、色んな事を言われたのかもしれない。

けれど、もしも美鈴ちゃんの両親が、美鈴ちゃんのことを嫌って

いるんだとしても、
「あたしもお兄ちゃんも、美鈴ちゃんのことが好きだよ」
あたしがほほ笑むと、美鈴ちゃんは軽く首を振った。
「それは、本当の私を知らないからよ」
「本当の美鈴ちゃんって？」
あたしが訊くと、美鈴ちゃんは黙り込んだ。
「――言いたくないなら、言わなくていいの。でもね、本当の美鈴ちゃんを知ったとしても、あたしもお兄ちゃんも美鈴ちゃんのことを嫌いになったりしないよ？　きっと」
あたしが美鈴ちゃんに向かって微笑みかけると、美鈴ちゃんはそっぽを向いた。それから、
「お金のために身体を売ってるんだよ、私。……親の言いなりになって」
小さな声で、そう言った。

正直、ショックだった。けれど、それを聞いたからって美鈴ちゃんのことを嫌いになるとか、そんなことはなかった。むしろ、それよりも言いたいことがあって、

なのに美鈴ちゃんは立ち上がった。誰もいない、濡れたように黒いアスファルトを見下ろしながら。

「美鈴ちゃん待って！」
あたしは美鈴ちゃんの腕をつかんだ。けれど、美鈴ちゃんも譲らない。
「ごめんね葵ちゃん。でも、もういいの。疲れた、から」
「よくないよ！　死んじゃやだって言ってるじゃん！」
これはあたしのワガママでしかなくて、けれどもう、それしか思いつかなかった。美鈴ちゃんはうっすらと微笑んで、首を振った。
「はなして」

「やだってば！！」
美鈴ちゃんはあたしを巻き添えにしたくなかったらしく、お互いを落とさないように注意しながら揉み合う形になった。
美鈴ちゃんは泣いていて、死なせてほしいと泣いていて、あたしは悔しくて、
「どうして……！」

――トンッ

ほんの少しの、衝撃。肩が当たっただけ。そのくらいの。

けれど次の瞬間、あたしの身体は一瞬だけ宙に浮かんで、それから落下した。

綺麗な青空。白いワンピース。小さな、悲鳴。

「どうして、」

あたしの言葉は、夏の空気の中に溶けて消えた。

32　怖かったの

俺の方に向かって、駅員があわてて飛んできた。それは美鈴が自殺しようとしたのに気づいたからではなく、俺の無賃乗車が疑われたからだ。

『――ごめん。慌ててたから、切符も何も通さずに改札を抜けてきたの』

申し訳なさそうにオドオドする葵を見て、俺は首を振る。

「いいよ」

俺は駅員に謝って、ホームの入場料を支払った。駅員はホームに座り込む美鈴を見て、「大丈夫ですか？」と不安そうに訊いてきた。

「大丈夫です。少し休めば良くなると思いますから」

俺がほほ笑むと、駅員は「何かあったらお声をかけてくださいね」と言い残して、ホームから消えた。

泣きじゃくる美鈴を、とりあえず近くのベンチに座らせる。美鈴は両手で顔を覆ったままだ。俺は困って、葵の方を見た。葵は頷く。

『死のうとしてたんだよ、美鈴ちゃん』

それを聞いて、俺は目を見開く。死のうとしてた。美鈴が？

『あの日、ビルの屋上から飛び降りようとしてたのは美鈴ちゃんだったんだ。それで、』

「私が葵ちゃんを殺したの」

葵の声が聞こえているのかと思えるくらいのタイミングで、美鈴が声を出した。しかし、美鈴の言葉を聞いた葵が、ぶんぶんと首を振った。

『違う、あれは事故だよ。美鈴ちゃんは、あたしを突き落とす気はなかった。でしょ？』

「……事故だったんじゃないのか？　突き落とす気は、なかったん

だろ」
葵の言葉を、俺が美鈴に伝える。けれど美鈴は、小さく首を振った。
「だけど、私が落としたようなものだよ。私が、」
『違うって言ってるじゃん！』
葵の否定は、美鈴には届いていない。美鈴はごめんと繰り返しながら、ひたすら泣きじゃくっている。
俺は向かいのホームを見る。次の電車が来るまで間があるせいか、閑散としていた。この光景を、先ほどまで美鈴は一人で見ていたんだ。
「……ここから飛び込む気、だったのか？」
俺が訊くと、美鈴は小さく頷いた。それを見て、続ける。
「葵が死んだあの日も、死のうとしていたのはお前だった？」
美鈴が顔をあげて、こちらを見た。なんで知っているの、という顔をしている。俺はため息をついて、頭をぼりぼりと掻いた。イライラする。

美鈴にではなく、自分に。

「どうして言ってくれなかったんだ」
怒りの矛先を、少しだけ美鈴に向ける。美鈴はもう一度ごめんなさいと呟いてから、
「怖かったの。人殺しになるのが。だから、あの時も逃げ出して――」
「違う」
確かに葵のことも言ってほしかったが、俺が言いたかったのは、
「死にたいくらい辛いんだって、どうして言ってくれなかったんだよ」

気付けなかった自分に対する怒りを、伝えてくれなかった美鈴に向けた。

綺麗な青空。白いワンピース。小さな、悲鳴。

「どうして、」

届くはずのない言葉を、あたしは呟いた。

「どうして、言ってくれなかったの？」

あたしの言葉は、夏の空気の中に溶けて消えた。

33　だいすき

「葵はお前のことを怨んでないし、俺はお前のことを嫌いにならない」
葵の言葉も代弁して、俺は声を出す。美鈴はゆっくりと俺の方に顔を向けた。赤く充血している目が、酷く目立っている。
俺は自分の鞄から、葵が買ってきた温泉旅行の土産を取りだした。そしてそれを、美鈴に差し出す。
「これ、葵からお前に」
「え？」
不思議そうな顔をする美鈴に、俺は笑う。
「葵がお前のために買ったんだって。だから渡しとく」
俺はそう言ってから、葵の方を見た。葵は笑顔で頷いている。その葵の目も真っ赤だ。俺は葵の言い分を聞いてから、それを美鈴に伝えた。
「葵のは、自殺でも殺人でもなくて、事故だ。本人がそう言ってる。だから、お前は殺人者とかそんなんじゃないし、怨まれてもいない。それから」
ピンク色の紙袋を見ながら、俺は笑う。
「今でも、お前のことが好きだって。それはずっと変わらないって、言ってる」
「言ってるって……」
困惑顔の美鈴に、俺はほほ笑んだ。
「分かるんだよ。兄妹だからな」
『ちょっとー、カッコつけちゃって！　変態なお兄ちゃんのことをこれからもよろしくねって、美鈴ちゃんに伝えてよ！』
「ばーか、言えるかそんなの」
何もない空間を見て笑っている俺を、美鈴は不思議そうな、それから少し不気味そうな顔で見ていた。

「辛い時は、いつでも電話してくれ。ていうか、言ってほしい。俺も葵も、お前には生きててほしいって、本当にそう思ってるんだよ」
ちゃんと支えてやれるかどうかは分からないけど、と付け足して俺は苦笑した。
それから、美鈴を家まで送った。手を、繋いで。

帰宅途中、美鈴は葵の土産をそっと開封した。ピンク色の紙袋には、この前行ったホテルの名前がはっきりと書かれていた。それを見てぎょっとしたが、美鈴は気にしていないようだった。中から出てきたのは、マスコット付きのキーホルダー。ご当地キャラらしきマスコットが、ハート形のプレートを両手に持っている。そのプレートに書かれているのは、

『いつもありがとう　だいすき』

美鈴はそのキーホルダーを握りしめて、何度目かは分からない涙を流した。

『美鈴ちゃん、大丈夫かな』
美鈴を家に送り届けてから、葵が口を開いた。先ほどまでは真っ赤だった空はすっかり暗くなり、月の光が目立ち始めていた。
「大丈夫だ、きっと」
本屋に行くのを諦めた俺は、自宅へと歩きながら呟く。
『美鈴には俺がついてるから？　ヒューヒュー』

茶化すような口調で、背後から葵が言った。
「お前なあ、」
俺は葵の方を振り返り、そして驚愕した。
先ほどまで気がつかなかった。けれど今、街灯の下にいる葵を見て、その違いにはっきりと気付いた。――気付いて、しまった。
『……なに？』
凝り固まっている俺を見て、葵が眉をひそめる。
「葵。お前……」

いつかこの日が来ることは、知ってた。

「身体が、透けてる」

だけど、それが今日だなんて、思ってなかったんだ。

34　最後、だから

未練みたいなものをなくせば成仏できるのかな。例えば、突き落とした犯人を見つけるとか。

あの日そう言ったのは確かに俺で、けれど本当に成仏なるとは思ってなかったのかもしれない。

葵の姿が、あまりにもはっきりと見えていたから。

今まで通り、これからも。そんな風に、頭の隅では思っていたのかもしれない。

だけど、やっぱりそれは、訪れるんだ。

驚くくらい、あっさりと。

透けている、と俺に指摘された葵は、自分の両手を見た。街灯の下にいるせいで、透けているのがはっきりと分かる。

『……ホントだ』

葵は笑った。それは、楽しそうな笑顔ではなくて。

「葵……」

うまく声が出ない。そんな俺の方を見て、葵はほほ笑んだ。それから、

『時間がないね』

寂しそうに、言った。

『ごめんね。身体借りるよお兄ちゃん』

「え？」

『これで最後、だから』

そこで、俺の意識は途絶えた。

目覚めると、見慣れた天井と照明が見えた。間違いなく俺の部屋だ。照明がやけに眩しく感じられて、俺は眼をそらしながら上体を起こした。ベッドがわずかに軋む。

「……葵？」

呼んでみるが、返事がない。時刻を確認すると、２１時過ぎだった。

美鈴を見送ったのが１９時ごろ。つまりまだ、あれから2時間ほどしか経っていない。なのに。

「――……葵」

もう一度、小さな声で呼んでみる。けれどベッドの端にも、椅子にも、葵の姿はない。

本当は、理解していた。

けれど認めたくなくて、何度も名前を呼んだ。

俺は立ち上がり、葵の部屋へと向かおうとした。

その時、自分の机の上に、淡いピンク色の封筒が置かれていることに気付いた。

見慣れた丸っこい字で、『お兄ちゃんへ』と書かれている。

俺は無言で、封筒の中身を取り出した。

『（変態の）お兄ちゃんへ

あたしは多分、今から成仏するんだと思う。だから最後に、お兄ちゃんの身体を借りて手紙を書いてます。勝手に借りちゃってごめんね。

美鈴ちゃんのことは、誰にも言わないでほしいの。あれは事故だし、……お父さんとお母さんには、うまく説明しておいて。お兄ちゃんならできるでしょ？　あたし、信じてるから。

今まで本当にありがとう。今までって、生きてた時と幽霊の時と両方ね。そんなこと書かなくても分かるか。……なんか焦っちゃってて、何を書けばいいか分かんないの。あたしはやっぱりバカだね。

あたしの部屋だけど、これからは勝手に入って好きなもの持って行っていいから。一応書いとくけど、エロ本は置いてないよ！　残念！

あたしの机の、上から2番目の引き出しに、お兄ちゃんに渡そうと思ってたプレゼントが入ってます。お兄ちゃん、もうすぐ誕生日でしょ。あたし覚えてたんだよ。さすがはあたし！！

死ぬ前に買ったやつなんだけど、結構高かったから大事に使ってね。

今まで本当にありがとうございました。あれ、しまった。これ書くの2回目だった。

それじゃ、そろそろいくね。家族3人になっちゃうけど、仲良くするんだぞ！！

ぴーえす。

あたしの机の上に置いてた「正しい恋のしかた」っていう本。あれもお兄ちゃんにあげる。がんばれよ、お兄ちゃん！』

「……色々と余計なこと書きやがって、あいつは……」

俺は、水に浸したみたいにヨレヨレになっている手紙を読み返した。

俺の涙が、手紙の上に零れおちた。

35　葵へ

あの日以来、葵の姿が見えることは二度となかった。
「本当に成仏したんだな……」
俺が呟くのと同時に、携帯が鳴った。美鈴からだ。
内容は、たった一言。

『夏樹君、いま大丈夫？』

俺は携帯の画面に向かってほほ笑む。それから

『大丈夫だよ。そっちに行くから待っててて』

そう返信した。机の横に引っ掛けてある鞄から財布を取り出して、一応中身を確認する。

マジックテープ式の、けれども真新しいその財布は、葵が俺にくれた最後の誕生日プレゼントだった。

葵へ

元気でやってるか。こっちは相変わらず暑いし、父さんは無口だし、母さんはチンジャオロースを作る頻度が高くなったし、だけどまあ元気でやってる。美鈴もな。

美鈴はたまに、俺の家に来るようになったよ。晩飯も、うちで一緒に食べたり。俺のピーマンをこっそりと美鈴の皿に移してるのは、ここだけの秘密な。
美鈴、お前に感謝してたよ。いや、してるよ。現在進行形。

ああ、あと。財布受け取ったよ、ありがとう。お前にしちゃ結構いいセンスしてるな。気に入ったよ、あれ。
お前さ、俺がお前の部屋に入るって言った時、「見られちゃまずいものがある」って言ってたよな。あれ、この財布（誕生日プレゼント）のことだったんだな。
妹の見られちゃまずいものがエロ本じゃなくて、兄としてはホッとしたよ。

財布、大切にする。ついでにあの、「なつきくん」って書かれたミニカーもな。

それから。温泉旅行に行った時に集合写真を撮ったの、覚えてるか？
俺はすっかり忘れてたんだけど、その写真にさ、写ってたよお前。俺の横に、はっきりと。
それ見て、父さんも母さんも泣いてた。あの父さんですら泣いてたんだ、信じられるか？

「葵はさ、やっぱり自殺じゃなくて事故で死んだんじゃないかな」
写真を見ながら、俺は言った。
「じゃなきゃ、こんな顔で写らないだろ」

そのくらい、そう思えるくらい、お前すっごくいい笑顔してたよ。最上級の笑顔だった。ピースなんかしちゃってさ。

父さんと母さんも、泣いてたけど嬉しそうだったよ。

しかし今でも酷いと思うのは、手紙だけ残して行っちまったことだな。なにしてくれてんだよ。言い逃げかよ。だから対抗して、俺もこうやって手紙を書いてるわけだ。だって俺は、成仏するお前に何も言えなかったんだぞ。酷すぎるだろ。

今まで本当に、ありがとうな。

お前が俺の妹で、本当によかった。

で、この手紙。どうやったらお前に届くんだろうな。

ぴーえす。

とりあえず、「正しい恋のしかた」の本はもらっておきました。サンキュ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5505v/

妹は俺に憑依する

2011年9月9日12時08分発行